特41
999

098127−000−2

特41−999

善悪草園生咲分（洋妾お花鬼清吉刺墨お市）

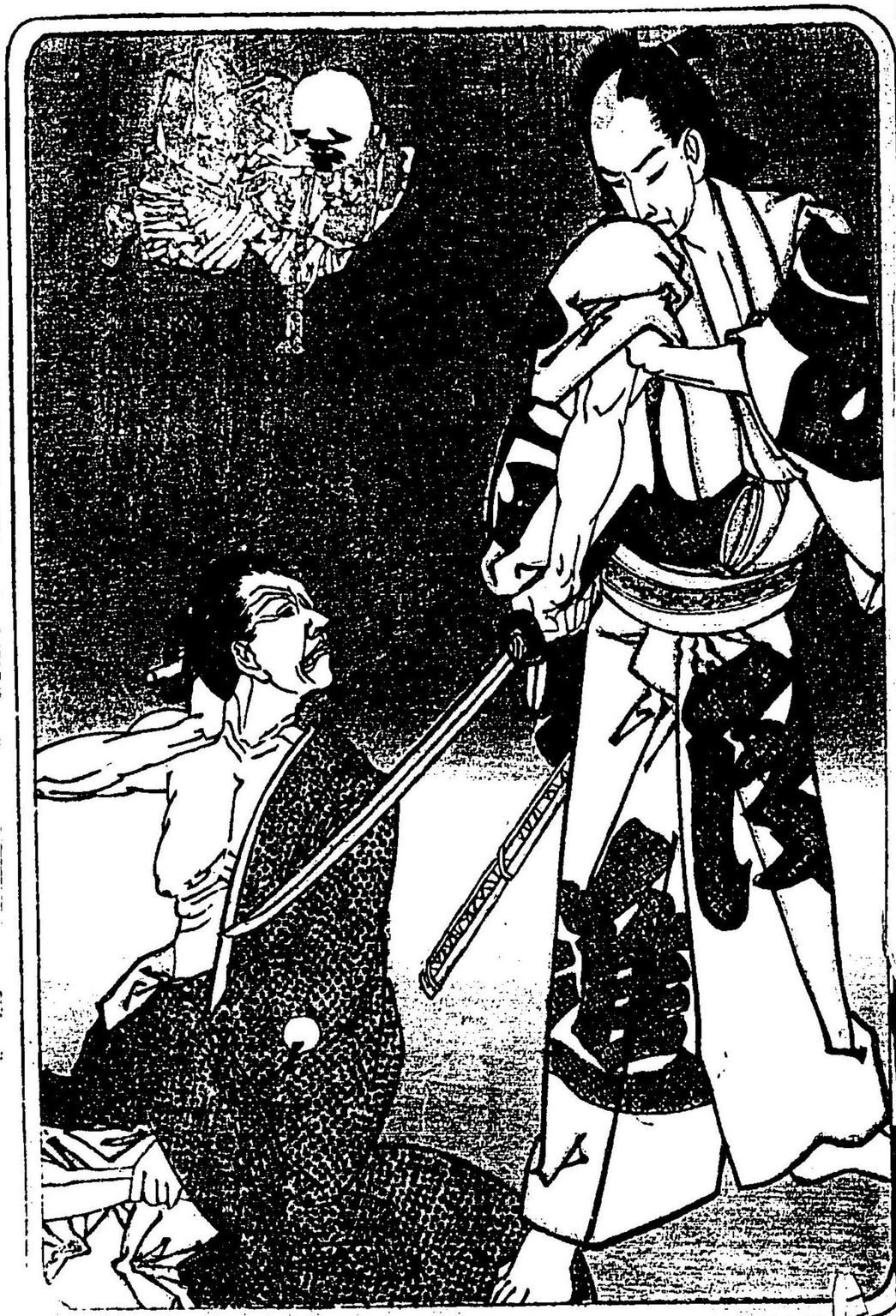
談洲楼　燕枝／演述

M18

DBT−0364

樂音樹い樂を聞て枝葉舞、虞美人草は、虞美人の曲をきて、二葉あひ拍あと掌の如し豈草木情なしといへんや硯兄彩露園中に造る善惡草い勸善懲惡の咲分に婦女童蒙の教草、先ま改進新聞を一讀の觀容、よく知り玉ふとまろなり、頃日柳香大人ま乞て根分をなし、晝夜勉強口演し、我柳亭の一ト株となりしかば各區の席ま鬻て諸君の眺ま供せしま同氣もとむる日本橋の培養家、室街の書肆銀榮堂の主人、此一ト本有益ある事を望み、鬼蕀の清を吉とし、花敷の美しき操を愛、一種の實を結ばんと先生の兎を得て、發兌急ぐのあまり、僕ま端書せよと迫る、戯場でつかふ通言の、婆アを言ても利ぬゆへ震ながら席文の聲色、細晩ならぬ細筆に入墨お市が半丁の、白紙を染て送るまな舞

此譚の演述者　談洲樓燕枝



目次

第一回　來嶋清二郎飛鳥山花見の事幷三人暴客投げ懲す事
第二回　三人の暴客清二郎と勝負の事
第三回　來島清二郎府中驛旅籠屋にて賊を押へると幷刺墨お市の事
第四回　お市日野の原よて清二郎の所持品盜む事
第五回　一刀流の指南戸田孫四郎が事
第六回　戸田門弟跡部伴藏師匠の娘花敷よ戀慕の事
第七回　清二郎日野の原よて旅人を殺事
第八回　清二郎花敷が聟とある事
第九回　伴藏魚賣藤吉共よ惡計密談の事
第十回　伴藏師匠を殺す主從愁傷の事
第十一回　清二郎花敷伴藏の行方探索の事
第十二回　俠客大五郎事勇藏賭場を開く事
第十三回　勇藏成島大五郎を殺す事
第十四回　鬼清吉大五郎れ敵勇藏を殺す事
第十五回　お市後室と姿と替旅人を欺く事
第十六回　鬼清吉再びお市を見出す事
第十七回　お市種々の惡事を物語事
第十八回　布施村の豪農私慾の事
第十九回　鬼清吉布施村へおもむく事
第二十回　鬼清吉お花と連成島村を立退事
第廿一回　清吉お花富士川よて難船の事
第廿二回　お市お花函根湯治の事
第廿三回　糸屋半右衛門お花よ再會の事
第廿四回　英人ミルシムお花お市を介抱事
第廿五回　お花お市ミルシム館よ住居の事
第廿六回　お花お市富士屋才助が宅へ赴事
第廿七回　妾お花召捕の事
第廿八回　半右衛門藝妓大和と根曳の事
第廿九回　材木屋手代久七大和思案のと幷阿波屋正兵衛實ハ清吉兩人を救ふ事
等三十回　内會師岡村龍藝宅よて物語の事
第卅一回　阿波屋正兵衛お市に再會の事
第卅二回　清吉富士川の難と物語の事
第卅三回　大和花柳八幡屋於て種談話の事
第卅四回　大和花柳姉妹相談の事
第卅五回　姉妹正兵衛を敵と喚ハる事
第卅六回　刺墨お市牢舍よてお花よあふ事
第卅七回　清吉お花共よ甲州路え出立の事
第卅八回　藝妓大和釣出し久と伴藏ハ送事
第卅九回　清二郎お花首尾能敵討の事
第四十回　清二郎躬ら名乘て罪狀を訴る事
傷の事　清二郎小塚原ハて死刑のと幷愁

目次畢

洋妾お花　鬼清吉　刺墨阿市　善惡草園生咲分

談洲樓燕枝演述
雜賀豐太郎編輯

第一回

咲き出でゝ眺望ハ今日ゝ飛鳥山年々歳々花相似たれど歳々年々同じからぬ人ハ宛然山に充ち滿を傾け舞ひ謠ふ塵俗あれバ瓢の酒よ憂きを拂ふて詩と作り歌を詠ずる騷客あり雅俗交々興ずる光景ハ絶て櫻のなかりせバと業平朝臣の詠れたる春の心の長閑さあるべし「何事ぞ花見る人の腰刀」既醉なしたる三個の武士(本)コレ山本最う玆ハ切りあげて是れより廓へ繰り込ん(で)解酲を觀るとしやう(山)ソレ結構至極妙だ田村貴公も異儀あしたらう(田)問ふまでもなし出陣出陣(本)然らバ御興をあげようオヤ〳〵先刻玆へ脱いで纏めて置いた外套がみえぬぜ(田)貴公の後ゐあつたやうだが(本)然う思つてハ居るが何處へ往つたか見ゐ無エ(山)了解〳〵ソラ先刻隣りよ居つた女連旨年增と半四郎そつくらと云ふ十六七の娘子貴公が頻よ酒を侑めた分つたか那の女の下僕が被布包を脊負つて歸つたが那的が一緒よ持つて往つたかも知れぬテ(本)其れハ怪しかる次第だ早速吟味すべしアレ彼處よ未だ居る樣

だ(田)來玉へ〳〵、コリヤ婦人下僕ハ如何致した(芳)ヨれハ先刻の旦那樣御免下さいませ何か疎忽でも仕つりまして御坐いますか供の者ハ前へ歸しまして御坐います(本)疎忽處か太い奴だ僕輩が外套を盜み歸つたぞ(芳)夫れハ以ての外ヨ次第で御坐いますが妾共の僕が如何して左樣な事を仕りませう(山)否々其方も知らぬとハ申させぬ此三人の者が脱ぎ置きし外套を下僕ヨ吩附盜ませたヨ相違ないコリヤ僕輩ハ誰だと思ふぞ紀州殿の御内山本文藏本多爲楠田村與太九郎と申す者だ然なくバ何故ヨ僕をバ前へ歸したのだ(芳)前へ歸ましたのでハ御坐いませぬ扇屋まで遣しまして待たせて置きましたので(山)如何樣ヨ申そとも被布包へ一緒に入れ持ち歸らせたヨ相違あるまい(芳)是れハまた迷惑な事卑妾ハ呉服橋外ヨ矮屋ながらも店を張てをりまする商人大和屋善助と申す者の妻芳と申し是れヨをりますハ娘柳と申す者決して左樣な所爲と致そやうな者で御座いませぬから若御疑惑が御座りまするバ扇屋までお越し下され包をお檢め下さいませ(柳)モシお母さん先刻向ふヨ居たお方が老年の女ヨ煙草入と扱かれたと云つてお出でしたから若や旦那樣方のお外套を盜んだも其女かも知れませぬ(芳)其れハ何んとも云へないが孰れにしても卑妾どもハ(山)知らねば

知らぬで宜しい外套の一枚や二枚紛失たからと云つて不自由ハ致さぬだが此まヽヨ濟せる事ハ出來ない此娘を連れて參る(柳)アレお母さん怖う御座います(芳)御疑惑が解けませねバ卑妾どもハ何處までも參りませうが娘バかりとお連れ歸りなされ何處へお出でヽ御座ります(田)是れより吉原へ參るゝ〳〵酌女ヨ連れて行くのサ(芳)卑妾の娘ハ未だ賣女ヨハ致しませぬから鬼程お武家樣でも其れハ餘り理不盡な(本)小癪な事と申すな盜賊の罪を免す代りヨ連れて參るのだ愚圖〳〵云やア擲切るぞ(田)エヽ面倒だ引立てい引立てイ(柳)アレ厭で御座います(芳)モシ情願お免しなされて下さいませ(柳)髪がこわれますゝら御免下さい(山)髪が壞れなくてハ面白くないのだ(芳)其りやア御無理で御坐いまそ(本)エヽ蒼蠅ア、痛へ痛へ(田)不埒な奴が顯れたぞ、ア痛へ〳〵(山)無禮な武士メ能く兩人を投たなウヌ眞二ッヨ、ア痛へ〳〵(無名氏)コレ女中跡を構ハず早く遁けるが宜い斯う投つけ置いたれバ動く事ハ出來ないから心配せずに早く〳〵(芳)誰殿樣ゝハ存じませぬが有難う御坐いまそ(柳)貴公のお庇護で助かりまして嬉しう御坐います(無名氏)禮にハ迨バぬ疾く行くが宜い(芳)左樣ならバ有難う御坐いますお柳早く來や(三人)ウヌ遁がさうか、ア、イ、タ、、、、

(無名氏)白痴威しの案出子武士ハ酒興ゑ乘じ婦人と捉へ亂暴なすゆゑ傍觀忍びず以後の懲戒何んと骨身ゑ堪へたか先刻承まいれバ其方等ハ紀州殿の藩士と申したが將軍家の御三家ゑも恁る無法の藩士あるか扨々笑止千万だ余ハ天下ゑ舍おき浪人其浪人ゑ投げられて手向ひも出來ぬとハ揃ひも揃つた腰拔け共思ハぬ嵐ゑ花を散したドリヤ今一眺め致して參らう

(三人)ユリヤ浪人、ア、イタ、、、、覺ゑて居ろう(無名氏)未だ人らしい性根ハあるゐゑハ、、、、

第二回

花ゑ狂ひし人も散り元の芝生れ丘山ながふ澄渡りゑる春の玉兎一層觀まさる夜櫻と眺め飽かでやまた爰へ來蒐る一個の武士ハ前ゑ暴客三人と投げ懲したる浪士なるが側ゑ在し棄床几ゑ腰打ちかけて獨言(清)春宵一刻價千金其れさへあるゑ爛漫たる花の眺めを添へたるハ無風流なる余ながら寔ゑ絶景を覺えたり傳へ聞く此邊ハ豐島平右衛門尉が平塚の城跡なるよし豐島ハ道灌ゑ攻められて主從百五十人終ゑ戰死し本城沒落なしたりとか武門ハ常とハ云ながら余も阿州の藩中なる來島清左衛門の二男と生れ父の保護ゑて當年まで弓馬鎗劍の道を學べど只文事ゑ至りてハ愧る所の最と多かり余もと妾腹ゑあるなれど父の寵愛深きより兄清之丞殿を措き余ゑ家督と相續させんと陰ゑ謀玉ふよしを洩れ知つたるゆゑ意を決し邸を逐電なしたるも是れより諸國を遍歷して文武二道と研磨なし一家を起さん所存なれど投して行くべき目的もなく徒らゑ日を經過しハも明日ハ斷然江戸と去らんと今日を餘波れ飛鳥山花もと心なしと雖もまた來る春ゑハ期を忘れず咲き出る時余もまた運命開く春ゑ遭ひ今日ハ鬱をバ俱ゑ語らん「咲ぬともつけぬ飛鳥の山櫻去年の言葉の色やわすれし」這ハ余ながら愚痴の諄言邊ゑ人のなさこそよけれ月の手前も恥かしハ(山)邊ゑ人のおきと思ふか(本)先程よりして吾々三人(田)汝の後を屬けて居たのだ(山)能くも前刻人中ゑて恥辱と與へし不埒な浪人(田)只今听けバ其方ハ四國猿ある阿波の藩士(山)相人ゑするハ不足なれど(本)此まゝゑして立ち歸るハ屋形の恥辱となる事ゆゑ(田)今手と下して吾々が(山)其息の根を(三人)止めて呉れん(清)偖ハ先刻懲しやりしを無念と思ふて參つたか如何さま兩刀を帶するうへハ其の性根なくてハ愜はじ余が息の根を止めんよりハ鼠ゑ齊しき汝等が首の飛バない覺期を致せ(山)ヤア小癪ある其一言前刻ハ度と過ごして飲だる酒の醒やらぬ爲

め測らぬ敗をとつたれど汝等如き疲浪人よ不覺と取べき吾々あらずサア尋常よ勝負致せ（清）云よや及ぶイザ來れャア（三人）ヤア（清）ヤアと双方が氣合をはかり拔き合せ火花と散して鬪ひしが元來優れし清二郎が覺ゑの手練よ三人ゝ切り立てられて敵する能ゝず終よ脆くも枕を列べ飛鳥れ山の明日をも竣たで春れ夜風と散り失せけり清二郎ゝホッと息吐き（清）無益の所爲と思へども恁る暴客ゝ世人れ妨げ討果すとも憾おし然りゐがら此儘立退くも如何なりゃ、幸ひと側よ樹し花折べからずと記せし制札引き拔いて裏面へ下緒の血よて何やらん書き認めて月よ透し（清）此の三人の者理不盡よも拙者へ切り掛け候故不得止討果し候也文久元年三月阿州浪人來島清二郎是れでよし〜謠山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相の鐘よ花ぞ散りぬる

第三回

大江戸を距る道程六里同じ武藏の府中驛甲州筋の街道よ夏よりうけて商人の往來も繁く休泊ゝ土地よ老舗し逆旅江戸屋頃及卯月の初旬よて上り下りの客多く孰れの坐敷も空間おく初更を報る頃までゝ晝の勞れを慰めんと四方の噺よ騷がしきも早晩竭みて床よ就けば憂さも白川夜船漕ぐ枕の音と鼾れと甚高々と聞えけり廊下よ沿ひし四疊敷にゝ額毛伸びて農筋通り色さへ白き一個の壯士が床よゝ就けど寐入りもやらず身の行末を左思右思尋案よ暮れば尙更よ寐られぬまゝよ枕下なる徒然慰する煙草胴よ花をや咲そらん折しも隔の襖紙を密と拔いて手を伸ばせ件の壯士の手荷物を引かんとするを見るよりも必定盜賊惡くき奴と俄破と刎起さあらげあく襖を拔くよ駭く賊を卒然よ取つて押へつゝ賊あり〜と叫びしよぞ間近き客ゝいふまでもなく渾家の者も起出でゝ各自其場へ駈來り見れば一人の老女をば壯士が膝下よなし居たり（主）是れゝ旦那で御坐りますか然うして御荷物よ別條ゝ御坐いませぬか（清）未だ奪ゝれたといふ譯でおければ安心をせよ（主）ヨーお前ゝ身延參りと云つて宵よ泊つた江戸の婆アさん原來ゝ女の街盜であつさか（客甲）是れ〜御亭主お前も逆旅渡世よも似合ない街盜であつたかとゝ汕斷千萬コレ此女ゝ東海木曾の両海道で人も知つたるお市といふ金箔附の街盜よ（客乙）去年の暮濱松で吾と合宿の客の金と盜んで遁げた其時よ見覺にのある額の疵（客甲）また此街道へ掃了よ廻つたよ違ひゝないモシ旦那次でよぐる〜縛りあげ早く突き出すが宜う御坐います（主）成るほど然う承まゝつてゝ楽てゝ置けぬ

ふん縛つて連れ出しませう（清）否々盗みをせんと致したもれゝ幸ひ僕の眼が覺めて居たゆゑ品物を取られたといふでもあいから別お突き出すよも追ぶまい（彦）旦那眞平御免下さりませ私しゝ此次の室ゝ泊合しました江州商人れ丁子屋彦兵衛と申ーまするが只今承まゝりますれど此的ゝお市とかいふ名代の街盗見ますれば最う六十ゝ近い年頃此まゝ突き出すも憫然ゝも存じますし殊に突出してゝ一同の者も係合せ左すれば急ぎの旅先で迷惑を致す者も御座りませうから貴郎様の思し召通り助けて遣ゝされまそる方が宜ーいかと存じます（清）如何ゝもお前の云ふ通り僕ゝ此まゝ放免てやる所存ぢや、コレ亭主其方が家でも盗人と出してゝ餘り譽めた譯でもあるまいから此まゝゝ免し遣ゝせ（主）何う致しまして盗まれやうとあされゝ貴郎様が免してやらうと仰やるうへゝ私し方に置きましても手數がかゝりゝず僥倖で御座います（清）コリヤ老婆聞けゞ其方ゝ名代の街盗ある由額ゝ寄する波ゝも恥ず頭ゝ戴く霜ゝもめけず能く惡黨ゝなつたものぢやな地獄の廳へ行くゝ近き其方ゝ訟法ゝ無益ゆゑ此まゝ放ちやるなれゞ何方ゝなりと野倒死して積りし罪を亡そべし行け〳〵（市）有難う御座いまゝ此御恩ゝ忘れませぬ皆さん誠ゝ喋がせまして濟みませんアゝ何んのこつた、

御亭主さん宿賃ゝ昨夜あげましたヨ、左様なら（甲客）助けて貰つたを喜だ口の下から（客乙）那の態ゝ惡いぢやないか（主）寧最う引捉へて出さうか（彦）ハテ旦那が無事あお取計ひを強て申してゝ濟まなうふう（主）成るほど是れゝ仰しやる通り（清）時ゝもう何時であうう（主）ハイ只今寅刻で御座います（清）左様かまた寐ゝ就いてゝ寐過ですであらう僕ゝ今から出立しやう（主）最うお立ちで御座いますか飛んた迷惑をかけました（彦）旦那がお立とあらゞ私くしも汐一緒ゝ立ちませう何んだか街盗沙汰で一個歩行も小氣味が惡い（清）お連れが出來れば夜道を行くゝ退屈がなくつて結構ぢや（主）左様ならゞ直くお膳部をさせませう

第四回

府中の驛と夜立ちして日野の原へと投蒐りし來島清二郎と丁子屋彦兵衛折柄小雨を催せゞ側の松の蔭ゝ身を寄せ（清）寅刻と聞いて出立しけれど夏の夜ゝず夜深きゝ刻限でも取違へたものであらうか（彦）仰しやる通り夜明までゝゝ未だ間もありさうゝ思れまそが淋しい路も旦那のお疵蔭で氣丈夫ゝ歩行ます併しゞラ〳〵やつて參りましたぜ（清）俗ゝ云ふ卯の芝下しとやらまた長雨ゝならねゞ宜いが、ハテな頻ゝ胸が差込んでアゝ、イタ、、是れゝ

如何したのかしらん（彦）旦那御加減が惡う御座いますか其れゝ飛んでもない藥でもあげま
せうか（清）アヽ苦しいアヽ痛いト須臾苦痛の体なりしが〳〵つたり其場へ倒れしまゝ物も云
はれず眼〳〵かり見張五體も痺れて惱む風情と篤と見澄し彦兵衛ゝ懷中より把り出だしたる
呼子の笛吹けば忽ち傍より（市）信號よやア近〳〵無ェ已やア先刻から來て居るのだ（彦）オヽ
姐公か首尾能往きやしたぜ（市）大儀であつた恰好雨も竭んだから其提灯と樹の枝へかけて
這的が正氣よならないうち早く方とつけるが旨ゝ（彦）合默です（市）先刻已を押へた時ゝ宵
二才よも似合ぬ力と喫驚したが此ヤア意氣地のない態ゝ如何だホンよ痺疾藥ゝ効ものだネ
エ（彦）府中の宿の出盡頭で消かゝつた行燈れ燗酒賣の荷を見るより欺して飲ませた其中へ
一帖劑た藥の効此樣なよ甘く循るたア餘つほど此方が上燗〳〵（市）藥で軀幹ゝ利かなくて
も性根があるか眼とバチクリオイ武士能く聞きあヨ己やア先刻も知る通り關八州ぢやア女
ながらも坐頭株の街道盜阿婆摺ともまた刺墨とも渾名をとつた阿市といふ金箔附の惡黨だ
ヨ江戸屋の坐敷へ踏ん込んで手盛を喰つた体よ見せ仲間の奴と課し合せ此日野の原へ連れ
出したも路費ゝ勿論衣類大小殘らず貰つて行く積りサ（彦）天秤捧を擔いでも千兩身代と人

のいふ其江州の商人と化けたも元い彦根生れ花櫻田の部家を脱け堅氣な打扮も白浪の流れ次第よ掙了で廻る彦五郎といふ己い盗人何んだビク〳〵爲たつて迫つ付か無エぜオヽ口惜かふう道理だ〳〵（市）大小と衣類と小包い一所よお前が持つが旨ヽ其胴卷い己が預からうオヤ〳〵些た之ッぱかりか見かけの樣子ぢや少なくとも五十位と思つたよ僅十両よ足り無エ金（彦）モシ姐公這的い何んでも浪人ですぜ（市）然うサテ如何も見込違へのやうだ（彦）併し左右く是れ丈けありや滿更損もゆきやすめへ（市）馬鹿をお云ひでないヨ損をする位なら命と取つて肝を賣らアネ、オイ武士命だけい助るから是れから向も物騒だ隨分氣を注けて行くが旨ぜ（彦）姐公ケイトが這入ると面倒だ徐々行くとしやせう（市）然うーやう〳〵アレ御覽未だ口惜さうよ悶てい居るヨ、サア往かうまた天色が悪くなつた八王子まで降ふあけりや旨が

第五回

武州八王子の大横町よ黒塀造りれ一搆い一刀流の指南をふす戸田孫四郎が邸よして主個い以前水戸殿の臣勘定役を勤めし身あるが浮用所金千両紛失の落度よより浮暇となり當地よ

來たり奥義と究し一刀流の指南よ月日を送りしが妻い前年沒去て宅にい當年十七ある花歌と呼ぶ女の外い内弟子來嶋清二郎と云者奴婢両人が在るのみあり頃及文久二年二月二十日孫四郎が舊友たる同藩池上伊織といふ者江戸表より訪來り主個と密談數刻の後再び江戸へ立歸りしが此密談を洩れ聞きし來島清二郎い譬古裝束の上よ外套を纏ねつヽ孫四郎の居室ゐ入り來たり（清）先生只今譬古と了まして浮座ります（孫）オヽ清二郎か大儀であつた昨日より風邪の爲めよ譬古場へも出ず毎もながら浮苦勞〳〵（清）不肖の身をもちまして先生の代譬古を致しまするい冥加な事で浮座ります（孫）何んとして〳〵門人と申し唱へいすれど其方の技倆い拙者抔が倒迫ぶ所でない今よもあれ拙者舊家へ飯參なしなバ宜さに推舉を致し志望の通り適れ一家を興させ申さう（清）先生甚だ失禮の申し分で浮座りまもが當三月十日までふ浮飯參の種ある金千両の浮調達の道い浮座りましたか（孫）何んと申す（清）只今綜新しく申すゐも迫びませぬが客年の四月九日日野の原よ於て悪黨の奸計ゐ羅り武士にあるまじき不覺と取り衣類路費い申すまでもなく両刀までも奪いれて已ふ命も終ふんとし、折から測ふず先生が浮通行よて手厚き浮介抱を受ましたゆを一命助かるのみならず當道場

へ伴ひ下され内弟子となし文武の教授海より深く山より高き恩に死すとも忘却せず然るに今日まで先生が开も何故に水戸家をば浪人ありしか承知せず折ふれなど尋を申し上んと存じしかど憚る事も候へんかと令嬢にさへ伺へで日と經過しに一昨日旧藩にて同役と承まへる池上生が來訪にて先生と密談と申す事ゆゑ無禮の所爲と存じながら竊に庭より忍び寄り椽側に沿ひ密談を洩れ聞きしゆゑ始めて知りし先生が浪々の身の原因然るに三月十日にへ先代法會の執行により當日までに紛失の彼の千両を調達し上納あらば舊の身に榮て家門繁昌の基を開かせ玉ふもせよ苟にも千兩と容易ならず從來恁る時もやと貯へあるならんが都合の程如何かと失禮ながら昨今の動靜をば伺ふに風邪と云へ血色の穩かならぬ金調れ一條ならんと察し奉る愚鈍に候へども此際に臨み救死の恩を報ぜずば人面獸心との胡盧を招かん曾て先生へ申し上たる如く小生の父へ阿州家にて相變の役附も仕つり如何樣にも融通れ道へ出來せんと心得ますれば本心を聞かせありて此調達へ小生へ仰せ附られて下さりませ先生偏に願ます（孫）思ひがけなき其辭樣子委細に洩れ聞かれしとあれば今更藏むも詮なき事推量の如く其千兩金の調達に苦慮致しをる寶へ聊か宛なから謝罪の種にもと貯へしに四五年間にて三百兩にあれど未だ七百兩といふ大金が不足の事ゆゑ如何にせんと胸のみ痛めをるあれど何を申すも浪人者金談すべき道もなく殆ど當惑に暮るゝのみ今其公が云ふ通り父公へ大藩の方あれば自然一時れ調達を下さらば皈參のうへにて佶度返濟を致すべし併此義へ其方を日野の原にて救歸りしかゝと云つて賴談をする樣でへ相濟ぬから決して其儀を申し出さず談じを致して貰ひ度い（清）然う打ち明けて談事を被れば清二郎命にかけて受合申しませう十日と云つてへ最う間も座りませぬから小生へ今日直ぐに出立致しませう（孫）何分宜しく賴み申すコリヤ娘花敷へをらぬか娘々（花）ハイ用で座りますか（孫）オヽ娘か清二郎を急用にて江戸まで遣から何か饌別に一献酌む準備致せ（花）畏まりました其れでもアノ清二郎さんへ江戸へ參るので座いますか（孫）何にサ直ぐに歸るから案じるにへ近ばぬアハヽヽヽソレ早く酒と準備せい

第六回

戸田孫四郎の娘花敷と云へるへ年へ二八を一ッ過ぎ顔へ彌生の櫻花の如く姿へ仲秋の新月

に似たり恁る土地に住むものから了得に父の教育嚴かある爲め只深窓にのみありて端居近くさへ出づる事なし然れども花敷の美人と聞傳へ嫁に迎へんと乞ふ者あり或は聟にならん抔云ひ込者もあれど孫四郎は孰れも是れを謝絶居るに深き所存のある事にか茲に戸田が門弟の一人なる八王子同心跡部秀藏の次男に伴藏と云へる者あり年紀は二十四五にして劍道も優れ門弟中には屈指の男あるが早晩花敷に戀慕し折がなあらば云寄らんと獨心に焦しをりしが一日孫四郎に急用ありて入り來り見ると主個は近邊まで赴き家にあらず花敷のみ已が部屋にて針仕業れ体あれば首尾ころ宜けれ平生れ本望打つけ云はんと密と寄り背後の方より腕と抱けば(花)アレ申戯を誰殿でゐ座いまそ(伴)僕です僕ですコレ伴藏でゐ座る(花)ホンに貴郎は伴藏樣お父さんの不在に左樣なお戯れはお廢しあさいませ(伴)申戯とは無情疾うから僕が慕れて居る心が卿に通じないいろ紫痴を云はずに愜へて下さい(花)オヤヤア飛んでもない御申戯不束お妾を然う思召して下さるはお嬉しうゐ座いまそが親の許しもないうちに淫行お事は致しませぬ特に貴郎はゐ門弟の中でも取締をなさるゐ身分でゐ座りませぬか其れに只今の樣な御申戯人の聞くまへもゐ座います其れとも妾を眞實に御懇望下されますあら何卒お父さまへお話下され父さへ承知を致しましたなら其時こそは妾も貴郎の御心に順ひませう(伴)有繁は先生の御仕込み丈けに堅くお出なすつた處は恐れ入つた併しモシ花敷樣此伴藏は先生れ許可がなくては承知があらねと那の此程江戸表へ出立をした來嶋清二郎あらば卿の方からお授けあさるのか(花)エ是れはまた怪しかる事を(伴)ハテお藏しなさるな此伴藏が黑い眼で見留めたからは違はない成るほど清二郎は僕より年も弱いうへ男も良し婦女は好くも無理でもあいが是れが藝妓とか娼妓なれば左も右も一刀流の劍道師範戸田孫四郎樣の令息女が何處の牛の骨やら馬の骨やら知れない男に惚れるとはまた醉興千万(花)アヽモシ伴藏樣妾は來嶋殿を庇護のでもありませぬが那の方も以前は阿波樣の家中何も牛の骨や馬れ骨では座りませぬ(伴)ソレ其樣に渠れ事と云へば眼を圓してゐ辨解が乃ち惚れてゐ座る証據今申さずとも承知でせうが去年の四月先生が江戸表よりゐ歸鄕の折日野の原にて行倒れ苦しんで居たのを連れ歸りなされ百般介抱をしてをやりなされたゆゑ元の人間になつて其れからは當今よては一人前の腕になつたと云ふものゝ阿波狼人と申し觸すも全く然やうゐ僞りか判然とせぬ渠が身分其樣な男に惚れやうよりは小身お

からも浄直參此跡部伴藏の望を愜へ玉へふゞ早速先生よ請ふて宿の妻なりまた僕が御養子よなつてなり何れよしても親公へ勿論卿の身も末安樂お添ひ遂げませうから只一度だけ諸と云つて暫と見せて下さつたら其れから後へ先生の得心あるまで手出しへ致さぬ是れほど思ふ眞實男少しへ察して呉れ玉へ〳〵(花)其御深切へ忝けなう御座いますが一應父様の耳へ入れ御得心なき其うちよ輕々しう夫婦よならうと左樣な約束へ致されませぬ(伴)縱令否だと仰せへあつても斯う云ひ出してへ僕も武士是非とも本望遂げまする(花)貴郎乱暴な事をなされますと父さまへ告ますぞへ(伴)其樣なよ堅く仰しやるお悪い事でへなし伴藏樣嬉いと云へせませう先生のお歸りないうち(花)アレお放しあさいませ(伴)紫痴よ聲を立ずコレサ〳〵(花)アレー誰か居ないか來てお呉れヨ(伴)最う堪ふない、ア、イダ、、、、(花)貴郎へお父さま能い處へお歸り下さいました(伴)ヨウ先生かコリヤ斯うしてへ(孫)動きをるお不屈者メ

第七回

五宿の驛の棒端よ巣を張るくもの息憩所一ぜんめしに酒肴と障子よ書せし怪しの茶店の繩を潜つて内よ入りし一個の武士へ床几よ憑り酒飯を命ずる其跡より竹杖肩よし入り來る馬士(馬)如何だへェまた曇つて來たやうだ(亭主)オヤ馬陀右衛門さん宜仕事でもあつたれか(馬)否ンよや此な先で新田れ太吾兵が馬の膝節と突ン折つて難澁をしなさると聞いて今手傳ンて起したので百文貰うたかふ直ぐ飛んで來た(亭)然して馬へ空荷かヲ(馬)否ニヤ空なら起すよ苦もあンべいか例の縞買が八王子の問屋へ送る金を積ンで居たのヨ(亭)成ほど縞買衆あふ金も巨多だらうかふ馬も膝と突いてへ容易よ起タれまい(馬)何んでも太吾兵の話ちやァ千二三百兩の金談米といふが己も生涯よ一度へ金持よやァならネへよも千両の金の上へ乘つてありと見度へもんだ(亭)江戸から縞買れ商人衆へ何んでも十二里を其日着で二八日よ往復をーて大金の取渡し其代り何の商人衆も長脇差と帶して自身の宰領大体へ二組三組一所にあつて行くものだが其商人衆も連れがあるのでせう(馬)何んでも商法の掛け引きとか云ふものがあるッて太吾兵のお客へ只一人だが腕よ覺えでもあるッだらう(亭)最う寅刻を下つたうへ今夜ァ闇でれまけよ曇日野の原の淋しい處を大金を持つてへ懸念な事だオヤお燭がついた〳〵イ馬陀さんお待ちどほ(武士)オイ〳〵親方何程よなる(亭)〳〵イ二百文

よ相成ります（武士）然やうかゾレ二百銅（亭）有難う御座いますれ靜よ入ちつしやい」函嶺ナァ八里ハ馬でも越すがナァエーと紋切形の高調子甚威勢よく手綱を把り道と急ぎし輕尻馬荷駄ハ附けねど金高よ重量ハどつ尻据たる客ハ廻し合羽よ三度笠銅金造りの長脇差入山形よ大の字と記せし提灯馬士よ持たせて來かゝる路ハ日野の原（商）五宿の盡頭で膝を折られてかゝァ何んだか胸噪ぎがするやうだから今度ァ已が落されて怪我でもせうかと案たが最う此首まで來りやァ大丈夫だかゝ（太）外の馬士なら知ら無エこんダが此新田の太吾兵が屬て居る旦那案る事ハあんねェ（商）中々威勢の旨人だ最う一息だ降ら無エうちにやつて貰はう（太）承知でごんすハァどう〳〵〳〵ウワァー切つたぞ〳〵（商）南無三泥棒メウハァー

アー（清）コレ商人了簡致して呉れ心よあらぬ斬取も恩人が歸參の資金七百兩を調達せんと保證しうへ江戸へ出でしが飛鳥山の一條より詮議嚴しく居堪まれず再び歸りの途よハ就けど今更金が調ハぬる何うも師匠へ云ひ出し悪く左やせん右やと思尋の折から先刻測ゝず五宿よて馬士の話を聞くよりも道ならずとハ存ぜしが師匠の恩よ酬ひしうへ名乘つて出でゝ處分とうけんと覺期を決して此所爲金子を暫く借り受けますぞ怨も罪もない人を殺害なすも師匠の爲め然りながら去年の四月此原中よて救ハれし其恩人へ酬はんと今また同じ原中よて人を殺すよ至りしハ佛者の所謂因緣か嘘て此身も刃の錆冥途で詫を致すであらう南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛少しも早く然うだ（非人）ァゝ怖かつた酷い事とする奴もあるものだなー

第八回

雛祭の故事ハ百般よ說あれど茲よ要あきを持て掲げされど古へハ三月三日とのみ限りしよハあゝざる由這ハ源氏物語よ由りても知るべし只上己れ祓よ贖物の人形より移りて當日よ之れを祭る事となりしハ信を置くよ近し然れば内裏雛立雛など其女子の好むまよ玩そび維新前までハ其裝飾よ善盡し美盡し之れが爲めよ身分不相應なる金錢を費せし者も多かりさ閑話休題今日ハ上己の節句とて浪人あがら戸田家にても愛娘ある花數が葛籠の裡よ納ある内裏雛と取り出して奥の一間へ幾段よか列べて桃や柳を挿し酒よ膳よ菱餅と亡母親よ敬と受けし備ものよて忙ハしきも結句心よ樂しきなるべし折から次の襖を披き茲へ入る來り父孫四郎後よ次いて清二郎（孫）娘雛の膳ハ未だかの（花）オゝ父さよ只今出來まし

たから申しあげようと存じてをりました、オヽ清二郎さん御元服をなされ大層お似合で御坐ります（孫）コリヤ娘其御膳よりハ且其方よりも簡を聞き度事がある他でもないが今日より此の清二郎と夫婦となつて呉りやれ（花）エヽ、其りや實眞で御座いますか（孫）現在の娘よ何嘘りを申す親があらうか其方よも昨夜申した通り此清二郎ハ一旦死を救ひし者とハ云へ遣度舊家へ歸參の金子千両を調達し持ち歸り呉れたる余が爲めの大恩人已よ明後日ハ當地を引拂ひ江戸表へ歸府なす中よて雛祭でもあるざれど年中函よ納れられて窮屈な思ひの女夫雛も世よ出る時の此祭恰度孫四郎の一身も今日までハ函よ入りしも再だび時機よあふたるゆゑ那の花の如く咲き出づる歸參の前よ家の根繼ぎと清二郎が辭むと肯ず漸と說諭して今日より余が聟として其方と配偶せ行末長く夫婦よする所存其れと申ても此ほど破門を命ぜし伴藏などがまた如何樣な亂暴をなさんも知れねバ清二郎を良人よなし置かバ大丈夫其方に別段異存ハあるまい（清）江戸表へ立越え調達仕つりし千両も畢竟父の許へ出入の町人より借り入れし金子よて別段小生が心勞と申すほどの事ハ御座りませぬよ御當家の相續人を仰せつけられまするハ分外な儀で御座ります（花）清二郎樣さへ不肖ある典妾とお厭ひで御座りませぬバ典妾ハお嬉しう存じます（孫）スリヤ其方よも得心かイヤ其れで目出度〳〵コリヤ清二郎此雛ハナ沒去た妻道乃が未だ余が方へ嫁ざる以前二の姫樣より拜領して大切よなし居たるが余が妻となり此後此娘を器けしが毎も上已よハ此雛の前で親子三人が一酌致そを慣例とせしが其れさへ涙人なしなるうへ妻も病死をしたるよゞ年よ一度の飾さへ以前よ替る形狀なりしが其方の盡力よより斯る疎末ハ儀式ハ今日限り來年ハ上已よハコリヤ娘孫の顏を見せるやうよして一家睦ましう酒宴を酌ませて呉れヨ此雛の前よて祝言ハ杯をとれバ道乃も嘸うし喜ぶであらう雛よ飾りし銚子盃媒人も親許すも親目出度祝言致すが宜い（清）冥加至極ハ其お辭清二郎身よとりましてハ再生の恩人たる其方をまた親となそ心れ裏欣喜のほど御推察下されませ（孫）親が頼みハ此娘見棄てぬやうよ添ふて呉れヨ（清）仰おくとも清二郎命よかけて（孫）オヽ其一言で澤山ちや娘も嬉しいであらう（花）是れが嬉しうなうて何んと致しまぜう（孫）ドレ盃事と致さうか一ッ祝ふぞヨ　謠　あひに相生の松こそ目出度うりけれ

第九回

蝶舞ふや空荷で戻る肴賣長さ日脚も早晩よ早山の端へ入田屋と門行燈わ記したる八王子驛の小割烹店二階坐敷の店の室よ該家の下女を相人よして酒酌み居たる跡部伴藏障子を披けて往來を瞻下す折がゝ玆を通りかゝりし藤吉といふ魚賣と其れか知りしか聲をかけ(伴)オイ〳〵藤州大分儲けがあつたと見え莞爾ものでで澄して行の(藤)オヤ跡部の旦那ですゝ相替らずお娛樂ですネエ(伴)左右く登つて一杯やれ(藤)其イッァ有難へ御遠慮なく頂きやせうト盤臺門よ内よ入り渾家の者へ會釋をして廳て二階へ上り來る(伴)サ、此方へ〳〵コリヤお梅何か甘い物をどつちり持つて來い(梅)ハイ畏まりました(藤)旦那へ今日わ何處へお出かけでしたか(伴)ナニ何處へも參らぬがの其方も知る通り戸田の娘を嫁よしやうと師匠孫四郎を談じをかけると那れ堅造メが首を掉り剩さへ已と打擲したから只得已の方から破門をした其後わ何だかムシヤクシヤ腹只酒計で暮してをるのサ(藤)ヘイ然ですか私が戸田さんで聞きやしたよやァ貴郎がお孃さんを口説て居る處を先生よ見認て大したお目玉を貰ひ破門とかとされたのだと云ひやしたが其れヂャァ貴郎れ方からヤットチの警古と止したのかネ(伴)否々劍術わ武士の本職だから止しわせぬだが何も戸田計が劍術れ師匠と云でもないかゝ已が止しされだが弟子れ方ゝゝ止したといふと外聞が惡いから出入の者よわ其樣な事を云ひ觸して居るのダ然うして其方わ毎日行くか(藤)ヘイ相替らず毎日行やすが何んでも先生わ明日江戸へお立ちで今夜わ御門弟衆と御酒宴があるからと云つて私わ肴を賣込みやした(伴)ナニ先生が江戸表へ立つとか然うして娘も一緒か(藤)モシ旦那貴郎さんわ未だお孃さんよ心殘りがありまして最うだめだからお諦ゝめなせへ那のお孃さんよやァ婿が出來やしたぜ(伴)何んだと婿か出來た其りや誰れがあつた(藤)貴郎さんよりも餘ッぽど好男子の那の清二郎さんが婿よなり然も昨日婚禮が濟んで該の若夫婦わ跡片づけをして十四五日頃よお立ちよなる想です何んでも聞きャァ清二郎さんわ阿波樣とかの御家來でお父さんわ大した金持だから過般江戸かゝ歸つた時千兩とられお金を携て來といふ事ですぜ、エーフー、アゝ空腹へグー〳〵仰飲た故か宜心地だ旦那眞ッ平御免無エ、エーフー(伴)偖わ那の狸爺わ兼々噂よ聞いた紛失金れ千兩を清二郎よ調達させ其れを引出よ花敷の婿よしたよわ相違ないェゝ口惜いナァ(藤)旦那エ其樣なよ口惜けりやァ返報をエーフーするが宜いエーフー(伴)清二郎といふ婿も出來四五日の中よ江戸表へ歸らバ所詮望わ叶わじ何うせ恨

のある奴等何うか鬱憤を散し度ものだが（藤）雲霓糞ッ痴意あんかんと其な晒落ヤア面白く無ェ何うです旦那一寸鬚を一個生捕てヒンとかシャンとか浮連やせう長へ浮世ゝ短へ命サ稼奴等ハ皆んな馬鹿サ、エフー、（伴）如何よも其方がいふ通ぢや長へ浮世ゝ短い命コリヤ藤吉其面白く生涯と暮すと云甘い相談があるが一口乗らぬか（藤）大乗〳〵生涯面白く暮せる相談なゝ命がけでも乗やせう斯う見ても江戸の傳馬町で牢食を喰つて來た石塚の藤吉で す何でも協議なせへ悪い事なら否だァ云ひやせんエフー（伴）其辭が頼母しいな高くハ云へあい事ちやコリヤ一寸耳を貸せ

第十回

埋れ木も花咲く戸田が歸參の首途門弟はじめ比隣の人餅を招いて開く離別の宴ゝ兼てハ娘花敷へ清二郎をバ婿と定め昨日婚姻を取結びたる披露をなし從來の交際厚き謝辭を述べしゝ客ハ孰れも之を祝し歡を盡して退散したるハ亥刻過る頃なりしが主個孫四郎も太く酔ひ己が臥床へ入りたる後ゝ清二郎ハ奴婢ゝ命し杯盃と取り片附けさせ昨夕替せし初枕其うつり香もさめやらぬ花敷が手を携へて鴛鴦の衾ゝ就きたりけり既ゝ其夜も更行きて子刻過し

しと思ふ頃賊入りたり清二郎〳〵と呼ぶハ正ゝ父の聲と思へバ少しも躊躇ず突と身を起て傍なる一刀帶して駈け出だせバ花敷も續いて後より雪洞携へ父の居室ゝ駈けつけ見れハ淺ましや孫四郎ハ枕下なる刀ゝ手をバかけたるまゝ血ゝ染みて仆れ居たり此時一個の監介兒ハ庭の塀と乘踰て立去る處なるが今一個の監介げんとする体なるを透さず寄て清二郎が腰帶把つて引きれろし刀の下緒手疾くも縛あげて傍へゝ引き据ゑ（清）コリヤ花敷眞公ハ全く傍絶命か殘憾な事と致たなコレ泣て居る處でハない一人ハ押へたれバ其の雪洞持てキヤ其方ハ肴屋の藤吉か（花）コリヤ藤吉父さまを殺したハ何者ちや今遁たハ誰れちゃ早く云へ（藤）清二郎さんゝ嬢さん傍免し下さいませァゝ悪い事ハ出來無ェ〳〵モシ清二郎さん斯く押られちやァ包ても藏しきれませんから皆招丁致しャス今遁げたのハ伴藏さんで御座います（清）其れちやァ跡部伴藏かコレ花敷何處へ行くのちや（花）父の仇の伴藏を追つ蒐け（清）ハテ塀と乘り踰え遁げたる奴殊ゝハ相人の藤吉が押へられしと知つたるうへハ何ゝ此邊ゝ彷徨ゐやう懦るな〳〵サァ藤吉何ゆゑ斯る所業となせしゝ眞直くゝ申せ（藤）ヘイ申し舛申上升今日御宅から歸る途筋人田屋れ二階座敷ゝ伴

藏さんがお出でなすつて私をお聘びなされ好な酒をバ頂きながら先生が今度江戸へお立ちよなる事また貴郎さんがお孃さんと御祝言のあつた事をバ話しまそると伴藏さんが大層腹を立つて居ましたが私の耳ヨ口寄せて先生が江戸へ歸るよやァ千兩以上のかねがあるから今夜一緒ヨ忍び込んで其金を盗まう甘く云つたら二ッ山だと惡い相談としますから私も喫驚しまして劍術遣への先生の宅へ盗賊ヨ這入るァ懸念ぉ譯だと斷りますと其先生ヨ認けられたなら己が引受けるから汝ハ金を持つて先へ遁けろまた金の所在ハ多分具足櫃れ中だろら恐び込んだゝ一番ヨ具足櫃を開けろと這入る鹽梅までも工夫をして否と云つたゝ首を取りさうぉ權幕ですから私も濟ま無ェとハ知りぉがら百両以上の金があつさならと思つて慾の間違でお客の歸つた其頃から此邊ヨ忍んで窠入りと覗ひ首尾能當室へ這入り具足櫃と開いて見ると絹風呂敷ヨどつちり包んだ金の重量ぶめたものだと欣ぶうち先生ハ眼を覺まー泥棒と聲と立てると伴藏さんがばつさり切つて其金を抱へて塀へ攀ますから私も續いて遁げやうとしたと遂々貴郎さんヨ押へられやしたが金も取らなけりや先生を殺したのでハありませんから何卒命ハお助け下せへ(清)コレ花敷悲しいハ道理ぢやが氣を取り直して然う泣くぉ劍道ヨハ優れられし方なれど未だ全く酒氣去らず窠入端をど不意ぉ起り、腕ヨ覺ぉの伴藏が切つたる刄先ハ一刀ながら忍ち落命なされしも深く炙所へ掛りしゆゑぉり多年御辛苦なされたる其甲斐ありて明日よりハ愁眉を開き元の身に花咲く時とぉりぉがら一夜と竣たで吹きつけし仇なる嵐ヨ此の御最期嘸御無念で御座りませう只憎つくハ跡部伴藏此うへハ藤吉を其筋へ引致行き伴藏の捕縛方を願ハん先づ舅公の死體を只附けヨ(花、モシ御父さま嘸御無念で御座りませう悲しい事ヨぉりましたのう(奴、婢) 御兩人樣飛んだ事で御座りますチェ(清)コリャ八藏提灯を點ろ會所へ届け出でん

第十一回

父の横死ヨ取亂せし妻を慰め清二郎ハ軈て藤吉を引つ立てゝ支配方の役所へ届け出でしかバ早速跡部秀藏を喚出しとなり伴藏が犯罪の趣きと申し聞かされ捕亡を八方ヨ趨せて探索ありしと雖も竟ゐ其行方ハ知れざりけり有志りーかバ戸田家ヨてハ昨日の喜び引き替へて今日ハ愁ひの人集へ法の如くヨ葬送りをいとなゝ七々日の追悼ヨも涙の乾く間ハなかりき左右するうちヨ卯月も過ぎ五月上旬となりけるが一日清二郎ハ衣服を更め花敷と傍ヨ喚び

(清)今更申すよも迫びませねど先生御在世の頃測らずも卿と夫婦れ御許ありて明日ハ江戸へ御出立といふ其夜半の那の噪ぎ切て歸參の料となす金子よてもあるあちゞ其れと持參し御家名を立て下さる樣御屋形へ願ふの道もあるべきあれど其の金子までも伴藏が奪ひ去つたる事なれゞ歸參の便宜も斷れたる御身左ある時よハ戸田の御家ハ長く埋れ木となりもやせん其れゆゑ小生ハ今日より元の御門人來島清二郎となり是れより江戸表へ出府し復度金子を調達のうへ立ち歸りますれゞ卿ハ其れと御持參なされ父公よ代つて戸田の家名を御再興なさるが御孝行の第一此儀何卒亡先生よ代り御許可なされて下さりませト云ふ顏倩々花歎ハ宛も怨しげよ打ち膽望(花)モシ吾夫貴郎ハ何ゆゑ卑妾へものとお包しなされます是れより江戸へ行くとハ嘘り貴郎ハ日野の人殺しと自首て出でるお心でせうト云ハれてハッと清二郎(清)アヽコレ靜よ花歎どの如何して其れを知られしか(花)知らいでなりませうか卑妾ハ貴郎の女房でゆ座りまそ此節人の噂よてハ二月下旬よ日野の原よて縞買と殺し金を奪ひし其盜賊ハ此八王子の武士なりとて專ら詮議が嚴しうなつたと听くよ一々胸よあたるハ貴郎が江戸より金子をば調達あされてお歸りありしも恰度二月の下旬よて殊よ先頃革文庫の底より出でし布財布ハ家よて見覺えなき品のみか血汐の染みたる痕さへあり江戸大碁と記せしハ一目に知るゝ商人の金財布よと思ふよつけ若しやと心注たれどお尋申すも心よとがめ胸ふとさめておりまそれど云ハぬハ云ふよまさりたる心の裏の苦さ悲さ方一貴郎よ嫌疑の被りて捕亡の向ひもせん然もある時ハ如何よして免るる術のあるよやと今日まで案し煩ひし折も折とて今のお辭元の門人清二郎と思ふて呉れよと仰しやるハ夫婦の緣を斷つたうへ後よ難義をかけさじと最とお慈悲ある御所存ながら卑妾ハまた其お心が結句怨しう思ひます人を殺して金を奪ひし非道の所業も父上の歸參の料よて慾よ目の眩みしといふ譯ならねゞ自首てお出であさるゝハ適れ健氣の御擧動縱令世の人ハ惡くいふとも卑妾の身ハ倶々よゆ處分受ける覺期でをります其れよ貴郎ハ胴慾よも元の他人よあれよとハ聞こにませぬお心でゆ座ります只此うへのお願ひよハ父の仇の伴藏を討つたる後よ夫婦倡倶自首て出るとも潔白よ變る心ハゆ座りまそまいモシ吾夫貴郎の爲よも身の罐助拔をーて卑妾よ仇を討たせて下さりませ(清)了得ハ戸田れ息女あり能くこそ推量致されれ最早包むよ事なし如何よも先生が歸參金の七百両を調達の爲め日野の原よて商人と殺し千百兩れ金子を奪ひ

千両を先生よ差出し百両ハ今よ所持して費用せざるハ自首て出でん其時よ私慾よあらぬ僕の潔白然れども無辜旅人を切害したれバ死罪ハ免れず當家の養子清二郎よて罪を享くるハ先生へ對し濟まざる事と思ふゆゑ只今の如く申しゝなるが敏くも推して其一言清二郎深く愧たり此うへハ爾の意見よ順ひ鼻の仇伴藏を索出だし渠が首級を鼻公の墓前へ捧げ其後俱々自首て出づべし斯る決心するうへハ當地よ在るハ不覺千萬一旦甲州路へ立ち退かん同國よハ伴藏の知己の者も多きと聞けり(花)其お辭よて身妾も安堵致しました甲州よハ以前爻樣の若黨を致しました大五郎と申す者がとりますれば左右く其處へ身を寄せて(清)如何よも其後よまた勘老なし姿を變て世を渡り俱不戴天の鼻の仇(花)軟弱腕も一念よて岩とも徹す古事あり(清)コリャ案じるな討たせてやるぞと夫婦互よ向來と示し合せる折からよ五月雨烈く窓をうちぬ

第十二回

維新の後ハ稍其黨を減少すると雖も今も關八州よハ餘波を存すると聞く彼の長脇差と唱へ自ゝ俠客を以て任ずる博徒們ハ舊幕府の頃是れと默許するの容ありし爲めか關東よ最も件の輩多かりき就中天保以降ハ野蠻の暴行を以て賺よしとする輩群出ゑたる中よ文久三年よ方り甲州勝沼の祐天仙之助をはトめ御嶽の權五郎成島大五郎大塚の勇藏相澤の助七落合の富五郎八代の七兵衛府中の要助抔ハ孰れも聞えし博徒よして所謂自俠を任ずる者どもあり頃及同年五月中旬八代郡上野村なる藥王寺よ於て大塚の勇藏が銀張の賭場を開くとれ案内よより成島大五郎ハ兩個の乾兒を連れ件の場所へ臨みしハ巧計の罠よ罹りしと後よぞ思ひ合されける不淨と厭ふ本堂に見るさへ最ど忌ハしき乾兒ハ鷄の毛と扱さながら(黑)今日ハ他の乾盃手合ハ來ず成島の大五郎乾盃一人だと云ふが如何いふ譯で外の乾盃ハ來ヲだゝう(白)黑助手前も盃の疎へ奴だ大きお聲ぢやァ云れハ無ェが今日ハ事よよつたら大喧嘩があるかもしれ無ェぜ(黑)其りやまた如何いふ譯だ(白)ソヲ手前も知つて居る通り那の大五郎乾盃の娘おのぶさんを此方れ勇藏乾盃が貰へよかゝると客年の鬼子母堂の一件があるから遣れ無ェと拒絶たゆゑ癇癖强へ勇藏乾盃ハ腹を立つて御嶽下で權五郎乾盃が花買の時何んだか紛紜よなりかけたを勝沼の祐天乾盃が仲へ這入つて其一件ハ事濟んだか濟まぬハ勇藏乾盃の胸の裡矢張娘よ未練があるやら當春よなつてまた貰へよやると今度ァ肝腎の娘が

否だと云つて遂々甲府の城代用達田宮勝三の處へ嫁よ往つたが餘まり面を潰した所爲と其れや是れやの遺恨から今日此寺で賭場を開き他れ乾盃手合ハ喚バず大五郎乾兒計り喚びよやつたハお傍去ゝずの熊手れ太吉が指尺とした魂膽だらう（黒）其イッァ飛んでも無ェ譯だが成島の乾盃も音よ聞えた力强熊手の太吉が助勢位ぢや乾分一人ぢや危險ぜ（白）喧嘩よりやァ己等も飛出て往て大五郎始め乾兒の奴等を打ちめるれサ（黒）成島の乾兒の中で清吉とか云ふ奴ァ大層强いと云ふ事だぜ（白）然うヨ何んでも因ァ四國浪人で去年れ夏から大五郎乾分よ屬て居て滅法劍術が巧計なうへ去年八月一日れ夜中巨摩郡の今福村で毎年の通りある鬼子母神の祭の折村の奴等が本堂へ備へて皈る供物寶錢鬼が顯れ持つて歸ると云ふ口碑のあるのと清吉が聞き不思議な事だと人よハ知らせず密と今福の森の中よて隱れて居るたァ去ら化けの鬼の面を被て本堂ゝら其供物寶錢を盜まうとした勇藏乾兒の弟熊五郎を卒然よ其處へ取つて押へ鬼の面をバ取除けて以後を懲して歸したので成島の清吉ハ剛勢な者だ鬼を押へた鬼を捉いたとぱつと噂が立つてゝらハ鬼清吉と渾名をとり今ぢやァ立派な客分株大した奴の居るうへよ山形浪人れ保科虎之助といふ劍術使へも居ると云ふから此方も中々油斷が出來無ェ（黒）何んでも筒井順慶流で旗色を見て强さうな方へ胡麻とするのが當世ダ（青）オイ〳〵黒助白瀧最う料理の準備よかゝるが宜い（黒）オゝ青九郎か然うして成島の乾盃ハ（青）兩個の乾兒を連れて今着た（白）鬼も來たかヲ（青）大丈夫ダ出羽の勘助よ大門の重五郎ダ打殺よ雜作ハ無ェ（黒）其れぢやァ酒の準備を去やうか（青）賭場が濟んだら本堂で飲む積りだから手抜けの無ェやう（黒、白）オゝ合點だ〳〵

第十三回

賭場の贏輸の了りし後開く酒宴よ本堂へ聚る博徒ハ今日の會主大塚勇藏を始めとして其乾兒の熊手の太吉外十四五名また客席にハ成島れ大五郎を上座に据ゑ其れが乾兒出羽の勘助大門の重五郎其他該近邊の破落戸あり早主客とも村釀酒の酔かゝ起す高話し（勇）いつぞァ听かうと思ひやしたが成島の乾盃の處よ客分株の清吉さんハ那りやャ一体何處の人です（大）那の人ハ私が未だ江戸よて部屋と飛廻る頃小石川の水戸樣の家中戸田孫四郎といふ人の仲間よ濟み込み神田川よて一橋の部屋の奴等と喧嘩をして既よ大勢れ爲よ殺されやうとした處を旦那のお庇護で助かつたのみか相人れ奴等ハ處置よなり私が名前が高くなつた其

恩人れ戸田様のお嬢さんへ貰つた御養子わて元ハ阿波様の御家來とやゝ夫れも近時戸田様が些と事故あつて浪人なされ八王子わ御坐るうち配偶よあつたとれ事また戸田様ハ病死あされ據ころなく夫婦連よて私を憑つて來なすつたが乾盃も知つて居る那れ虎之助よりハ優れて腕がありますれで否だと云ふのを强て賴み乾兒の奴餅へ譽古れうち早晩見馴れ聞き馴れよ今ぢやア立派な博徒だが去年今祠の一件から誰れいふとなく鬼々と渾名をとつたハ氣の毒な譯サ(勇)甲州筋の博徒で劍術遣へや浪人を抱え込んで居る者ア澤山あるが成島の乾盃の様よ右と左りよ鬼と虎まゞ喧嘩よやア大丈夫其うへ金ハ酒井町れ田宮れ方ゝら仕送りで博奕の資金も安心だらうし實よ羨ましい身分だネ〳〵(大)オイ勇藏乾盃博奕の資金を田宮から仕送るゝア餘計な口だぜ成るほど娘を呉れたからよや舅と聟の間だが先ハ素氣な城代出入女房の縁で大五郎へ資金を送つたと噂をされちや先も困るし又私も多くの乾兒のある事だ聟の家から資金を借り博奕とうつと云ハれた日よやア是れでも成島の親盃とか大五郎とか稱れる名折れよなるから其様な噂ハ廢てはしいぜ(勇)成るわど是りやヤ道理だ正可よ成島乾盃が其様なケチな性根でもあるめへ然し娘を仲間交際れ已かゝ所望をした時よハ嫁よやらぬと体よく謝絶り其舌の根の乾か無エうち田宮れ方へ遣るかゝにやア餘つぽど甘味があつたれだろう、トサ人ハ惡い評判をとる者サ(大)何んだと嫁よやれぬと斷つたと其りやアお前の賴んでよこした媒人が其様な旨加減な返答をしたか知ゝ無エが私の方ぢやア斷然と他の者なら左右も大塚の乾盃よやア遣れねエと拒絶た(勇)フム其りやまた如何いふ譯で(大)第一娘が否だと云ふました二ッよやア弟の熊五郎が神れ祭禮を假托よ泥棒したを清吉が助けてやつたよ一言の挨拶もせず其弟の成敗もせず打棄て置く親盃様よも似合無エ塚のハか無エお前ゆゑ嫁よやアやれぬと返答した其返答よ腹を立て喧嘩とするあら買ふ了簡で手配をして待つて居れど出かけて來ぬのハ了得よ勇藏大した者だと譽めて居たが其れぢやアお前ハ未だ知ら無エのか(勇)イヽヤ知ら無エ事ハ無エ疾くより其れと聞込んだが今日招いたハ汝と己が命れ取遣りする積りで祐天ハじめ他々の顔揃へぬも其覺期だ(大)ナント(熊)親盃よ鼻をあかせた返報に今日の賭場でハ命れ雌雄サア大五郎立ち上れ(大)偖ハ然うした計畫であつたか何んの汝餅が小癪な事、勘介重五郎用心しろ(破落戸)オイ乾盃兩人の乾兒ハ私餅が引き受やす目的怨の大五郎ハお前さんの手で(勇)オヽ合點だサア大五郎

(大)心得た、アーこりや切つたなまだ起ち上らぬうち卑怯な勇藏(勇)默言てくたばれ(大)最初の痛傷ゑ自由あらぬか切て一太刀(勇)エヽ面胴ゐ(大)ア、口惜い(勇)苦しからう旨態だ(熊手)オヽ親盃遂々やつゝけやしたな(勇)然うして兩人の乾兒ハ如何した(熊手)一個の奴ア殺しやしたが那の勘介の野郎ハ遁けやしたせ(勇)其れぢやア村へ報知ゑ歸り殊ゑ寄つたら清吉ばじめ那の虎之助が來るかもしれ無エ這的ア血の雨降らさゑやならへ無へ

第十四回

藥王寺の虎口を遁れ成島村へ立飯りし出羽れ勘助ハ息繼ぎあへず云々と勇藏が巧計の罠ゑ羅りたる喧嘩の顚末と委細ゑ語り乾盃の身が氣遣ハしけれバ急ぎ加勢と賴むなりと云ひすて丶復引き返せしゑぞ其れと聞くより虎之助ハ直ぐゑ清吉許赴きて是れより乾兒を呼び聚め藥王寺まで繰出さんと道へバ清吉押禁め乾兒を聚めて押寄せんより貴下と兩個馳せ向ひ勇藏はじめ大塚れ乾兒の奴儕を鏖殺大勢往くゑハ追バないと野酒し染めたる裕衣の上を凛々數結ぶ繩襷手馴れし一刀腰ゑぱつ込み駈け出だせバ虎之助も寔ゑ宜也と引屬ふて藥王寺へと急ぎ行く」無慘やな大五郎ハ心ハ矢楯ゑ慄れども炙所と初太刀ゑ切りつけられ身體自由ならざれバ終ゑ勇藏が遺恨の刄の下ゑ斃れ大門の重五郎も大塚れ乾兒熊手の太吉儕れ爲めゑ弄殺しとなりたるが大塚方よてハ出羽の勘助一人遁げ歸りしゆゑ復度成島方の乾兒儕大勢寄せ來たるゑハ相違なしと人數を集へ待つ處へ前ゑ遁げたる勘助が死物狂ゑ切つてかゝり最と目覺しく鬪ふ折から草駄天走りれ鬼と虎夫れと見るゑより聲とかけ(清)勘助必ず敗をとるな鬼清吉と(虎)保科の虎が(清)向つたからにやヤ大丈夫だ然うゑて乾盃大五郎どのハ(勘)オヽ大哥か、乾盃ハ勇藏の爲めゑ遂々最期また重五郎も弄殺ゑゑ(清)然う听きやア容赦ハ出來無エヤイ勇藏ハ何處ゑ居る鬼清吉と保科の虎が乾盃の復讐ゑ出ろけて來た男の面を飾つて居るならサア茲へ出て勝負をゑろ(勇)喧ゑい青二才メ大方汝が來るだうと手ぐすね延いて待つて居たのだ重る遺恨で大五郎ハ物の見事ゑ殺ゑたかゑ是れかゑハ汝もまた去年弟を凌辱めた其返報ゑ勇藏が刀の錆と爲てやるから大五郎に追つゝいて一緒ゑ地獄へ行くが宜い(清)エヽ面倒な囈言ハ听か無エサア拔いて來い(勇)ソレ皆の者(乾兒)合點だ(虎)オイ清吉大哥此乾兒の吸亮野郎ハ悉皆僕と勘助ゑて引受けて片附とするうらお前ハ鴈首の其勇藏を(清)其れぢやア跡ハ賴んだぜサウ勇藏(勇)心得たト扳き合ゑて丁々と合す刀

と刀より散る火花最と物凉く双方が呼吸をはゝりて闘ひ去が肯でゝ清吉の手練より及ぶべき漸次〳〵より受太刀より怯れの出でたる勇藏が動靜を窺ひ清吉が大喝一聲打ちおろす劍の下こそ地獄なれ右手の肩より乳の下まで斜めよりと切り下げられ苦と叫びて仆るゝ處を脳より て弱腰蹴返せば仰向狀よなると現るうちまた閃き去清吉の刀の鍛ひ腕れ練名の勇藏も首ゝ忽ち飛んで屍骸ゝ傍より仆れぬ此情態を看るよりも虎之助と勘助を取卷居たる乾兒併ゝ宛然蜘の子を散らすが如く四方よさつと退く体ゆゑ尚追蒐んとする處を清吉ゝ左手より首を携へあから喚びとゝめ（清）目的敵の勇藏を首より去たうへゝ遁げる奴を追蒐討よも迫ぶまい（寅、勘）オヽ清吉大哥大手柄〳〵私們も又乾盆を殺去た時の手傳八熊手の太吉を殺去たれば重五郎の怨みもはれやう（清）今日の喧嘩ゝ大塚から需て起去た事のみか俠客交際よあるより去さ欺去て殺す卑怯な勇藏併去此まゝより去ても置けまいから直ぐより乾盆仲間へ廻文を出去て善惡の仕埒をつけるが己等の面ゝれ（寅）如何にも是れゝ道理だ（清）其れぢやア一旦此場を引き揚げ再度の喧嘩より花を咲かすか（勘）無事より濟むかゝ他々の（寅）親盆様より委任としやう（清）八王子から流れて來て夫婦が長の御厄介其の返報さへ夏の夜の短い命ゝ果敢ない御最期寔より人間ゝ脆いものだナー

第十五回

茲ゝ甲府の堺町近時開業し逆旅ゝ城代用達田宮勝藏の別宅よして姉のれ菊が萬事の統轄新舗なから深切な欵待振より客も多く最と繁昌と極め居たり奥の座敷ゝ身延詣の江戸講中の六人一座下向と見えて草臥足を伸して雑話の興より入りしが中なる一個が行李の蓋を披けて俄より騒き出し（甲）サア無エぞ〳〵此中へ納て置いた胴卷が見え無エぞ（乙）六人の外よやア客の居無エ此座敷紛失をする筈ゝ無エから何處外へ納忘れたのだらう（甲）先刻湯へ這入る時腹かゝ脱て此行李の中へ入れたのだから他へ入れるも何も無エ（丙）然う云や先刻六人が湯へ往たとき已が前へあがり此へ這入ると訝しな婆アが座つて居たが已を見ると是れゝ座敷が違つたかと挨拶もせず出て往つたか何んでも渠奴が怪ーいぜ（丁）夫れぢやア其婆アより違へ無エ當宿の番頭を喚で詮議をするが宜い（甲）オイ管伴さん〳〵（番）ヘイ〳〵御用で御座いますが（甲）御用處ぢや無エ大變な事が持ち上つたのダ已の行李より納てあつた胴卷が紛失した（番）ヘエー夫れゝヤア飛んでもない（甲）ナニ飛んでもなよもありやアしチヘ其胴卷の

盗人ァ向ふれ座敷ゐ居る婆ァれ客だ（番）ゐへエー（丙）其樣なよ喫驚するよ及バ無エから突然往て那の婆ァと捕縛ッて招丁させるのダ（番）ァ、モシ〳〵那の御老人ハお武家方よて御家來も御出でゝ御座いますから左樣な事をなさる氣遣ハ御座りませぬ然ー貴郎方の御座敷へお這入りなされたのハ先樣も御係合せマァ貴郎方の御疑惑のはれまするやう一應申しあげませう（甲）此番頭ァ訝う婆ァの肩を持つぜ汝ハ渠と馴合つて已の金を盗んだナ（番）如何致しまして左樣な事が（乙）馴合なけりや婆ァれ處へ往つて詮議をしろ（番）夫れでハ如何か貴郎方も御一人だけ御一緒よ（丙）オゝ已が先刻面を合したからグーとも云ハせず招丁させてやらァ（番）如何か左樣よ願まそ、ヘイお勞れ樣で御免下さいませ（彦）オゝ番頭かサァ此方へ何か用かな（番）誠よ早恐れ入りまするが此お客樣が胴卷を行李よ納てお置きなされたのが紛失し若や此お座敷へまざれてハエヘヽヽヽ（丙）モシお武家樣私們江戸中橋の職人ですが六人連で泊り込み先刻一緒よ湯へ俗て私が前よ座敷へ歸ると其首よお出でゐさるお婆ァ樣が私れ座敷よお居なすつたが無沙汰よ人の座敷へ這入り斷りもゐく歸つて行きなすつたハ訝な人だと思ひやしたが老人の事だから別係ハありやしめへと思つて居た跡にて調りや連の奴の胴卷が見えゐくなつたハ何も其お婆ァさんが盗みなすつたのぢやありますまいが座敷を間違へるほどの耄碌だかゝ万一足や手よ引つかゝつて此方の座敷へ參りやしやそめへかと夫れでお尋よあがりやした（彦）默つて聞けば百般の事といふ奴ぢやコリヤ此御老人と誰と思ふ忝けなくも天下の御旗本安藤右京亮殿の御隱居だぞ無禮を申すと其まゝよハ差し置かぬ（老）ァゝコレ彦藏然う聲高よ云やんな妾も今度ハ微行の參詣成るほど先刻小便所よ往つた折座敷と間違這入つて居たのハ妾の過り先方で疑ふも無理でハあいから那の客の得心をするやう手荷物類ハ元より身纏脱いで檢させるが宜らう（彦）如何して左樣な事が（老）否々何事も旅行先でハ堪忍が大事コレ其胴卷とやらと紛失させた人妾よ疑ひの有のも道理サァ手荷物から妾の身體また此家來も裡躰にして篤と檢めて歸るが宜い（丙）眞實よナァ盗人太々しいとやら然う云や意地だ檢めてやらう（番）ァゝモシ迂潤な事をあされてハ私方が迷惑を致しまそ（丙）盗人よ違へ無エかゝ檢めるのダマァ此行李から、成るほど此裡よやァ無エ其れぢやァ婆ァの衣類を（彦）コリヤ待て町人後室の御身よ手を添へて若ゑ其胴卷が他よあつたならバ其方ハ其儘よ容赦ぞ（丙）オゝ已の命でもゝやァ、ドレ婆あを（老）帶ハ勿論

衣類ハ見せやうが下繻絆と腰巻ハ女の嗜み脱事ハ出來ぬ(丙)然う拔かすほど彌よ怪ゑい是非検めて(甲)オイ〳〵丙吉胴巻ハあつたヨ確よ己ハ行李の裡へ納たと思つたが着替の浴衣よ纏んであつたからモウ検めるよハ迫バ無エモシお客さん賊よ疎忽を申ゑやゑた御免下せへ(丙)笹棒メ能く捜してかゝ紛失たと云へバいゝよ、〳〵、〳〵、何うも賊よ飛んだ疎忽で眞平御免なせへ(彦)コリヤ(丙)ア、痛へ〳〵(彦)胴巻が他よあつたなゝ命をやると吐ゑたから汝の一命と取つてやるのぢア(甲)何うかモシ御了簡オイ〳〵皆お來てお詫と云ろ〳〵(番)お内儀さん〳〵(菊)皆さん何うぞお静よ願ますへイ御免下さりませ(彦)其方ハ當家の主個か(菊)ハイ身妾ハお菊と申す當家の統轄を致て居まする者(彦)左樣か然らバ前刻よりの事ハ聞たであらうが不埒極る此町人此儘よハ差免ゑ難ゑ召連行きて成敗をするゝ届其他の事を頼み申すぞ(丙)ア、お内儀さん拜むから助けて下さい〳〵(五人)何分穏便よ取扱ひを頼みまそ〳〵

第十六回

(菊)其ゆ立腹ハゆ道理でゆ座いますが妾方よて起つた噪ぎ取鎮めまそるハ主婦の役決して悪い樣よハ致しませぬから何うか此お人ハ妾へお預け下さりませ佶度貴郎の早那樣のゆ面目よ關ハるやうお取計ひハ致しませぬ(彦)約束通り命をとり同行の奴等も一々よ率行所へ引く筈なれど主婦が左までの心遣ひ強て肯ぬも何とやら後室樣如何仕つりませう(老)佛詣での事なれバ命をとるハ好まぬ事また先刻もいふ通り這回ハ微行の旅なれバ只何事も穏便ふ主婦へ委すが宜いであらう(彦)成るほど仰もゆ道理イヤ何よ主婦然らバ其方へ委すからゆ名義よ瑾とつけたる償ひ金否附添の僕の了簡もあれバ手落なきやう取計らへ(菊)宜しう御座ります情願暫く御容赦下さいませ、サア皆さん此方へお出でおさいませヤア飛んだ事が出來ましたが此うへハ金と轉んで話とつけるより外ハ御座りませぬ(丙)何うかお内儀さん金で濟むなら私等ハ(甲)胴巻の金を盗まれたと思つて諦めやすかゝ(六人)萬々扱ひを頼みやす〳〵(菊)妾しの勘考でハ何うも三兩や五兩でハ濟みますまいが貴郎方から二十兩お出し下さいませ妾方でも五兩を出し都合二十五兩をやつたなら多分勘辨として呉れますから飛んだゆ散財でハゆ座いまそが命よ代る賓ハなしお諦めなさいませ(丙)何して〳〵お前さん處から金を出させて濟むものか十や二十なら安いものだサアお内儀さん是れで扱ひをし

て下せへ（甲）然うとも〳〵畢竟私等が忽卒しいから斯んな噪ぎを持やげたのだかゝ爰の家へ損をかける譯ハ無ェ（乙）左右く早く賠詫を〳〵を（菊）其れぢやマア妾し方の出金ハ後のゞ相談よして一緒よ往つて詫賠を去ませう、ヘイゞ免下さいませモシゞ家來樣一寸貴郎れお耳と拜借（彦）而て取計ひが着きましたかな（菊）今更何んと申しやうもない此方々のゞ無禮併ー貴郎の方でも後室樣の仰やる通り微行のゞ參詣と申す事なればゞ勘辨の出來惡い處とゞ勘弁下さいまして情願妾を助けると思召し御内々のお濟せを願ますまた是れハ甚だ失禮でハ御座いますがお駕の賃れ補よもなりまそれゞ有難う御座いますからお受け納めを願ひます（六人）私し共も此通り平蜘の樣よなつてお詫を致ますから何卒御勘辨をヘイ〳〵願ひます（彦）成るほど今此所で公沙汰よ致そとさハ江戸表なる御前のお名も出で後室樣よも御迷惑あらん六人の奴等へ對してハ内濟よ致そ處なゝねど其方が歎願も道理よ思へゞ一應後室樣へ願つて見やう、コレ内儀今後室樣へ願しに格別の譯を以てお許しよなり万事内濟よしてやらうとの仰だ就いてハ此まゝ當家よとるも快よからねゞ直ぐ御出立なさるかゝ然う心得ろまた此金子ハ僕が預り置いて追つて御披露申そゞ只今箇樣の金子抔を差出してハ却て御腹立と招く基ぢや只僥倖なハ其男だ（菊）早速にお聞濟下さいまして有難う存じます（六人）私等ア命拾ひをした心地でヘイ〳〵有難うゞ座へやす（彦）コレハ後室樣最早お立ちでゞ座いますか僕も身準備と仕つりませう（老）濟れた事と聞かぬうち早う出立去ませう（菊）誠よお歎待も申しませで飛んだゞ迷惑をうけ恐れ入りまして〳〵座ります（彦）輕少ながら旅籠料と茶代だ（菊）貴郎是よハ追びませぬ（老）イヤ、不都合ハ不都合渡世ハ渡世夫れハ是非とも受取つておきや（菊）行屆いたる其お辭有難うゞ座います（清）後室待つたイヤサ刺墨お市一寸待て（老）ヤハテ誰やらを呼ぶさうあ（清）オイ〳〵お市見忘れたか三年跡の卯月の夜日野原よて衣類大小其方よ預けた浪人だマア歸つて來て面を見ろ（彦）ヨ成るほどお前ハ（清）彦根無宿の彦五郎中々役者ハ巧計あつたナ（市）ホンよお主ハ那の時の浪人オイ彦、斯うなつちやャ仕方が無ェ頭巾を脱いで貰つて行うヨ（清）オイお市日野の原よて汝等が爲めよ手盛と喫つた浪人も今ぢや博徒と成島材鬼清吉たア已が事た度胸を据て其方へ直れ（市）其れぢやア頃日大塚の勇藏親盃と殺して名の高へ鬼清吉たアお前の事か然う听いちやア惜くハ無ェサア清吉お前よ年貢を渡すから日野の原での返報よ皺澤山な此白髮首痛く無

ェやう切つて呉んな

第十七回

(清)藥王寺の喧嘩の尻も祐天乾盆が仲裁で大塚方が不理と極り細腕おがら二代目の乾盆様よ成島村大五郎殿が五十日の追福を濟ませて今日ハ親類廻り當家の姐公と訪よ寄り奥の噪ぎハ何事かと覗いて見れバ覺えある武州の日野で巧計の罠へ刺墨お市の化けの皮其相棒ハ彦五郎浪人ながらも両刀を佩した以前の清次郎よ立ち歸つてする此成敗性根と居て一遍の念佛唱へ覺期をしろ(市)三年經ちやヤ三歳よなると日野で見た其時よや意氣地の無ェ痩武士と思つたか今甲州で人も怖れる鬼清吉よなつたとハお釋迦様でも知りハすめへ其清吉よ化けの皮と剝かれて茲で殺されるハ願ふてもない妾が僥倖額よ寄する皺の涙白髮交りの梅干婆アが列ぬる臺詞ぢやなけれども皆さん後學の爲めだ听いてお置きヨ故郷ハ江戸ハ番町で是れでも安藤某甲といふ三百石の旗本のお嬢さんとハ生れて來たが十四の時よ仲間の小猿と名のある吉之助と手よ手を把つて邸と抜け出し手鍋を提げた娯樂も飲むとうつとよ身と持ち崩し男の爲めハ吉原の勤めもあしよ品川の土藏相撲も僅の間汐の引け過ぎ逐電して

旅から旅の宿場稼ぎナヨン〳〵格子鉄砲のソヽリ節までたヽきあげ大部屋小部屋のかそりとり姐公〳〵と云ハれても色と慾との二道あゝ相對密夫筒もたせ番屋の手數も度々よて傳馬町へも五六度竟よやうでよ黒印の刺墨お市か悪黨の看版かけた性根から果ハ手荒い人殺し網の目洩れずハ用よなり輕い處置ハ流刑八丈嶋へ送ゝれて芋で命を繋いだも算へて見りやア十五年赦免よなつてまた元ハ江戸へ歸れバ悪事ハ廢ず島で擧けた幼兒をまた種よして呉服店の萬引騙りも其孩子が死んで只得街道盗其れも今ぢやヤ寄る年に目印注て掙丁も出來ず詮方あしの甲斐國佛參りと見せかけて爪繰珠數も鬼の眼に見留られぢやヤ百年目七十過ぎて元のお市がまだピンとしゝ此首骨漸く此世を秋の空檜舞臺で仕込んだ軀幹を此草深へ甲州の露と消えてハ六道の辻待ち方りで待つて居る河内山の兄貴や次郎太夫が嘲笑ふかも知れ無ェが是れも年貢の秋が來たのだサア斷然とやつてお呉レヨ(彦)オイ姐公何うせ時代な裝束で供として居た彦五郎次でよ冥途へ出かけやせう乾盆お手ハ草臥やせうが此首も何うぞハ一途よ(清)見ゝけよよゝ無ェ丈夫な魂ひモシ姐公今もいふ通り今日ハ大五郎乾盆の五十日あり特よやアハ宅で血と見るハ餘んまり出ゝした譯でもありやせぬから此両人や

ア私が宅へ連れ歸り其うへ成敗しませうからお客方へ然う云つて下さいませ(菊)妾も先刻うら何うある事かと案じて居たが然うして下さるなら双方も安心(六人)音ゝの聞こえた清吉乾盃が折能く茲へ來なすつたゆゑ私等も此婆アの騙りゝ乘らず廿五両が無事ゝ戻るもお祖師樣のお利益南無妙法蓮華經〳〵(清)コレお市其方ゝやア云つて听らす事もあれバ彦五郎俱々己が宅まで來い夫れまで命を預けて置く(市)何うせお前さんゝ委せた命何處へなりとも參りませう(彦)實ゝナア日野の原にて殺したと思つた人ゝ甲州ゝ今隱れの無へ人とありし已等ゝ依然其時から今も隱れて世を渡る闇い軀幹で居ると云ふゝ惡事と廢せと天道樣が茲へ乾盃を引き出したのか(市)腰ゝ梓の弓矢とる家ゝ生れた身の上も心からとて六十の白髮と惡事ゝ染たる根性(清)其髮かつらを洗ひ落し元の白髮の人間ゝなれ無ェこともあるまいかゝ己と一緒ゝ、姐さんお暇ましうは坐いました(菊)お歸りかエお花さんへも宜しく云て下さい

第十八回

當年(文久三年)葉月の上旬よりして降り續きたる雨のみか暴風さへも吹き連り何處の村も凶作ゆゑ小前の者ゝ難澁を極る中ゝ巨摩郡の布施村の豪農幸左衛門ゝ慈悲といふ事を知らざるうへ私慾を逞うして高利を貸附け凶作の爲めゝ借財の延期を云ひ込むと雖も更ゝ肯入れず約束通り抵當の田畠を已が所有とし飽くを知らず贅澤ゝ日と送るより農民們ゝ憤怒ゝ堪ねど借たと相違もあい事ゆゑ只嘆息して日を送りしが或日布施村をはじめ我島村の農民が打連立ちて清吉の家ゝ來たり總代なる太兵衛といふが口を開き(太)今日參つたゝ乾盃を男と見かけ頼ミゝ來ました只いふゝ外でもない布施村のアノ幸右衛門の一件サ知つての通り今年の凶作此の暮の凌ぎが如何であらうと思ふ中で約束通りと貸金を取り立てゝまた田畠ゝ勿論家財まで抵當流れと持ち歸り何程難澁と述へ情實を語り賴んでも諺ざゝいふ馬の耳ゝ念佛元來借りた金なれバ返さゝやならぬ譯がらなれど他國の人といふでゝなし此郡中の凶作にて喰ふや喰ゝずゝ小前の者が其日と送る困難ゝ知つても居やうゝ斟酌なく然も高利の貸金を容赦もなくて取り立てるゝ餘りな事とゝ思へども畢竟借りたが此方の過り今更苦情をいふでもなけれど何分ゝも此冬分丈けを待つて呉れるやうと村一同かゝ賴みゝ云つたが中々肯ず金の返せぬ其時ゝ渡すと書た田地田畠また家財をバ持つて來い然もあい時

ハ人夫を遣つて片ッ端から取り立てると毀鐘聲で怒鳴つけられ一向もおくて歸つたが今此中で那の男の手酷い取り立てよかゝつてハ二ケ村の百姓ハ人間の乾物よあらねばならず其首で一同相談して何んでも是れハ乾盃から幸右衛門へ説論として貰うたなら豈矢待たぬと云ふ事ハあるまい貴兄ハ前の大五郎どのよも優り斯んな事よハ馴れて居やッしやるとの事何卒二ケ村の者を救助ると思ふて能い分別を出して貰い度夫れで出ろけて來ましたのぢや(清)成るほど噂よ聞いた高利貸の幸右衛門私ハまた其れほどの人とハ思ひませなんだ云ハつしやる通り當年ハ思ひがけない此凶作平常乾盃とか長脇差とか云つて年中遊んで暮して居るも皆此れ村のお庇護と云もの不肖ながらも皆さんかゝ私へ頼むとある事なゝ一番私が引受けて力限りよやつて見ませう(太)其れぢやア頼みを聞いて下さるかヤレ有難い〳〵皆衆悦こバッしやれ(百姓)夫れで私等も安堵をしましたイヤもう他々よ乾盃顔も數人あれど此處ハ清吉乾盃の樣に理非の判つた人ハあく只賭奕だけで暮して居るゆゑ斯んな事を頼んでも引受けねど了得ハ以前が武士だけよ早速よ承知をして下さつて有難い添げない(清)何んの禮よ迫びませうぞ大勢の人の爲め是れも死あれ乾盃へ恩を酬ゆる一ッです(太)其一言ハ彌よ感服、時よ皆衆乾盃が承知として下さつた事を是れ〳〵一同へ告げて安心をさせませう(百姓)如何さま皆んなが首を長くして待つて居ませうかゝ些度も早う(花)皆さんマア宜しう座いまを何も下物ハありませぬが一献飲つておろへりなさいませ(太)如何して〳〵頼んだり馳走になつたりしてハ罰が當りますす其んなら乾盃何分よも(百姓)宜しうお願み申します(清)一兩日の中よ佶度良い返事を致しませう(花)モシ清吉さんお前マア今の樣よ早く擔任て若し幸右衛門が承知をなけりや如何する氣だへ(清)平常爾よもいふ通り八王子から大五郎を憑つて餘儀なく斯んな身よなつてハ居れど片時も忘れられぬハ師匠れ仇那の伴藏を索るよ何時が何時まで此土地よ斯うして居てハ望も達せず只いつて今更斯々と他人よ話せぬ事柄ゆゑ宜い引汐がと思つた折から恰好幸ひ此一件善惡ともよ身を退く種先頃命を助けて置いたお市ハ駿府に居ると云ふかゝ那的を憑つて仇の穿索(花)然うしてお前が幸右衛門へ談じる考案ハ(清)ハテ何うせ結局ハ暴れ日和サ、オイ保科を喚びよ遣んな

第十九回

夫れ那よして樂しむハ麻殼の火の如く一旦熾んなりと雖も消るよ速く其心正しくて苦しむ

ハ泥砂ヨ濁る水の如く日を經て原れ清さを見るべし布施村の幸右衛門ハ貪慾慘忍飽くを知らず只己私の利ヨのみ趨り他人の難儀ハ蛙の面水呑百性を虐て其身ハ奢移ヨ耽るものかヽ陰ヨ集が强慾を爪彈きして憎めども陽ヨ諷刺る者もなければ我威ハ漸次ヨ募り居たり今日も所々より取立てし貸附金の勘定了り金銀錢を土藏ヨ納め主人を見眞似ヨ無慈悲の手代を傍へ呼び近かづけ（幸）サア皆の者マア一煙するが宜い何が世間でハ不作だとか不景氣だといふが先己の手許ヘドシ〳〵金の取上がる處を見れバ凶年だの不作だのといふのハ畢竟小百性們が口實だ其樣な口ヨ乘せられてオイソレと貸金を待つてやつてハ己の渡世ヨならぬ皆の者も知る通り過般も成島の清吉とかいふ語論坊が眞目面臭い顏をして小前の者が難澁だらゝ待つてやれのイヤ然う取り立てが嚴しうてハお前さんの爲めヨならぬのと道理らしい事を吐かして來たが一体お前ハ何んだ天下の御法度の賭奕をして世を渡る無賴者であらう高利かハ知らないが私ハ金を貸して利足ととり活計とするが商賣其金の返らぬ時ハ抵當書入れを取るハ當然の事で何處へ出やうとも不都合ハなしまた待つ待たぬの了簡ハお前方の世話ヨハなりませぬと一本刎てやつたゆゑ乾盆とか田業粉盆とか平常ハフイ〳〵云つて居る那の清吉も二言と云ハず歸つて往つたが此貸附商業ヘ那んな奴かゝ愚圖〳〵云はれて堪るものか何んと然うでハないか（手甲）旦那の仰しやる通り是れが平常立派な渡世をして居る者あゝ知らない事賭奕をせねバ間の手ヨヤレ切つたの殺したのと喧嘩計りを渡世にするゆゑ人も怖れる鬼清吉其んな奴等ヨ彼是と故障を云ハれるやうな弱い商業でハないから旦那の一言にグーとも云ヘず遁げ歸つた態ハ可笑かつたぜ（手乙）那奴も元ハ大五郎の客分でハ居たなれど大五郎が大塚の勇藏ヨ殺され其仇を討たとやらで今ハ成島の乾盆楼然し那の女房ハ中々の上代呂物ダ（幸）又乙七が女の噂か是れだから取立てヨやつても女戸主の分ハ何うも捗取らぬやうだアハヽヽヽヽ（下男）旦那樣大變だ〳〵（幸）杢助か大變とハ何事だ（下男）何事處でハあい今成島の鬼清吉が乾兒を大勢引連れて茲のお家を毀しヨ來ました（幸）エー（下男）何んでも女や小兒ハ早く遁げろ然うして先づ土藏からぶッ潰せと今裏口かゝ押入りましたぞ（幸）其イッア大變サア皆の者取押へろ〳〵（手代）何うして〳〵那の仲間が然う一致して來てハ私們二人や三人で追ッつく者でハありませぬ夫れよりハ貴老がお出でなされお賴みなさるが上分別サア早う〳〵（幸）是りやマア飛んでもない事が出來した」土藏

よ在りし金函と庭へ積みあげ貸附の証文類よ火を放し燒き立つるゆゑ幸右衛門ハ腰を抜かして大聲あげ(幸)アヽモシ清吉様お話ハ如何とも致しますから其証文類を燒くだけハ何卒勘辨して下さい(清)強慾非道の布施幸右衛門と天よ代つて清吉が罪を鳴らして今茲よて命と断つべき奴ゐれど妻子の嘆きを想像り一命だけハ赦しやる然る代りよハ貸金の證文類ハ斯の如く殘らず燒いて帳消ダまた此有金の内三千両と難澁人へ施行として差出したるハ奇特の至り依つて此まヽ持ち歸り布施成島の両村はじめ難澁人へ與へるから其心得でをるがいヽ(幸)アヽ決して施行の出金のと其様な覺ハ(清)金を出さぬバ命が無エぞ(幸)是れハ無法な(乾兒)何んだ無法だコリヤ汝が無法を思ハないで大きあ口を利きやアがるあ今日乾盃の出向いたのハ汝が高利の下よ哭く小前ハ者を救う爲めダ留め立てすると毋屋ぐるめ火を放け灰よしてしまうぞ(幸)アヽ是れハ無慈悲夢ながら覺よ〜

第二十回

理屈の上の議論よりハ唯腕力よて懲すまゑ宜けれと不意よ起つて清吉等ハ布施村へ押出し幸右衛門と恐怖させ各村の小民より金借して差入れある證文類ハ悉皆之れを灰とあし且庫を開きて同人が蓄へ居る穀物類また金三千両を持ち歸り幸右衛門が命代りハ施行なりとて各村の貧民よ配與へしかバ小前の者ハ清吉とそ鬼よハあらで佛よと涙と流し欣合びしが布施も一時ハ清吉等の猛威よ只得爲すがまヽよ金穀と出だし貸附の證文を燒かれしとハ云へ元來默して止むべきよあらねバ直ちよ此趣きを八代郡市川の陣屋へ訴へ出でたよ依つて陣代よりハ此れ暴民を捕縛せんと早馬を以て甲府城代へ上申しヽに城代 松平右京亮ハ以て代の外立腹し急ぎ召捕て糺問せよと甲府在勤佐藤駿河守組下齋田左門粟田口監物の兩人伍子を隨がへ出張するの手配よぞ及バれける恁て此の事を保科虎之助ハ早くも聞き知り清吉へ云々と告げ此の捕人と引受け切死せんと勇み立つと清吉ハ押とゞめ元來公儀へ手向ふ所存のあるよあらず畢竟ハ幸右衛門が強慾の鼻とあかさせし事なれど此うへ公儀の捕人へ手向ひするハ宜くないから一旦當地と引き揚げて余が本望と遂げたる後ハ一人で罪を引受けるから少しも早く離散をせよと卑怯の辭も一物のありとぞ知らぬ保科をはじめ其他の乾兒も清吉が云ふが隨意よ承知をして軈て再會を約し成島を離散なしたる其跡よて清吉も女房を連れ夜よ紛れ密よ村を立退きしが黒澤道へ蒐りてハ大塚市川の陣家あり設し見認められな

ハ身の上なりと路と轉じて町田、大和田、今福より東南湖ヨ出で鰍澤ヨ來り茲よりして豫て志投す駿府へ出でんと名ヨ聞こえたる富士川ハ彼れ急流の渡船を頼みヨ下り行きしハ同年ハ十二月とぞ聞こえける）駿河と甲斐ヨ境せしと云ひ傳へたる藤の架橋人工ながら釣橋の巧妙ハ世ヨも最と高き其中央ヨ佇立し商人風の一個の男流るゝ川を佶と瞰遣り（商）過般から降りつゞきし空も漸く晴れ日和常さへ激しい此流れ雨ヨ一層水嵩増し見てさへ慄とするやうだが最前吹た山おろしハ砂石を飛す颶風今樵夫れ噂を聞けば此の川筋で下り船が顛覆へつたといふ事だが成るほど人の話ヨも聞いた屏風岩だの七尋岩のと其れ岩ヨぶつゝかれど船ハ忽ち微塵ヨなり度々難破もあつだとやう夫れゆゑ身分ある人ハ此下り船ヨ乗らないが路次を急ぐと樂なれで命知らずが乗ると見えるアレ〳〵迴ヨ水中を浮きつ沈みつして居るハ正ヨ人に相違あいが大方今の噂ヨ聞いさ難船とした人であらう救けてやるヨも爲樣ハなし何卒早う最寄の人が見認けて救けてやれバ宜がオヽ此方ヨ見えるも女の人川とハ云へど今の嵐で水ハ宛然海ヨ齊しく女の身でハ苦しからう如何救ける考案を爲度もだ（編者曰く此商人ハ何人あるか姑く茲ヨ匿名す看客且猜一猜へかし）鬼と呼ばれし濟吉も早瀬波間ヨ陥入りてハ泳ぎを知らねバ余知らず押流されて浮つ沈んつ稍く側の大岩ヨ縋りついてホッと息吐ぎ（清）思ひがけない山おろしに不意をくらつて船ハ微塵水心をゞ知らあいゆゑお花を救すける事も出來ず無事ヨあるおら氣懸りな南無正八幡大菩薩未練の願ひ事ながら本望成就致しまするまで両人ともヨ一命無事ヨ偏へヨ應護の助力とバ願ひ上奉つると両掌を合して念じ居たり

第廿一回

矢を射るごとき早瀬ながら不意ヨ起りし山れろしヨ風波立て川としも見ぬ流れを浮つ沈んつ漂ふお花が生死の境折からまたも下り來る船ヨて夫れと見認めしゆゑ棹を直して直近かく寄り（船）先刻の吹きおろしでやうれたと見えるサア女中此棹へ睨り摑まンあさいオット。左樣だ〳〵、太分水を飲んだモシお客さん其處の藁束を取つて下さい此寒いヨ水ヨ陥ちやア渡世人でも慄ハ無ニヨ況して女で嘸困つたらう（乘客）幸ひ茲ヨ江戸から貰つた婦人の藥清心丹があるかうヤア是れを服せるが宜い（船）其イッア有難へオイ女中氣を正ヨするがいゝ安心しな大丈夫だヨ（花）ハイ有難うムいます思ひがけない山れろしで船をバ岩へ打つけ

たゆゑ微塵ゑ砕けて乗合ハ皆々水へ陥入りましたが此早瀬ゑてアレと云ふ間ゑ流て互の行方も散り〳〵(船)然うしてお前ハ一人かチ(花)イエ〳〵所天も一途で汚座いましたが如何なりましたか生死も知れず(船)其れハ何んしろ氣ハ毒だつた然し正可ゑ男ゑら死んでしまう事もあるめへから落着先せへ知れてありや佶と逢れるゑ難へねエが全体何處へ行きゐさるのダ(花)ハイ駿府まで參る者で汚座いますと云ふと聞き居る乗合れ老婆ゑお花と倩々見て(市)ヨ、お前さんハ成島のイヤ那れ成ほど駿府で見かけたるれ花さんでハありませぬか(花)オ、然う云ふお前ハお市さんか(市)ヤアヤアヤア飛んでもない目ゑお遇ひなすつたネエモシ船夫さん今まで氣が注かなかつたが此女中ハ妾の知つた人だヨ(船)其れハ何より宜い都合ダ(市)サア其濡れたのを脱で穢いけれど是れとお着替なさい嘸喫驚あすつたらうモシお花さんへ妾ハ急ゑ乾盆へ願て見度事があつてお宅へ出懸けて見ると云々と噪ぎの事も聞きましたゆゑ何卒お目ふかゝつてお力ゑと氣ハ惱れどもお兩人が何處ゑお出でか分らねば設や妾と憑つてと心注いたので鰍澤へ出で此下り船ゑ乗り込ミましたが思ひがけない御災難夫れぢやア乾盆も御一途ゑ(花)在所へお出でゝ委細の事と聽きあすつさなゝ身の上の詳細事ハ云ひませぬが實ハお前の察しの通り夫婦連ゑて出かけたも駿府へ往つでお前を憑み暫く稼ぐ積りで居たが折も折とて無情難船ゆゑゑ夫婦散々此うへ頼むハお市さん何うか所夫の生死をば(市)宜ふムいまそお案じなさるお妾が爲めゑハ命の親の乾盆だもの何處までも身ゑ引き受けてお世話をしませう妾も今でハ駿府ゑて乾盆の意見に順ひふつゝりと改心をして口入渡世彦五郎も清水港の次郎長乾盆へ身を寄せて以前の汚れと洗ひ落そ稼ゑ間ハありませぬモシお花さんお前ハ女氣ゑ喫驚もしなすつたらうが乾盆ハ男の事何處の岸からゐ揚つて反つてお前の身を案じて居なさるでせう努ず落贍なさいますな(花)此船が下ゝなけりや妾ハ終ゑ助かるまい是れも全く神佛の庇護とハ云へど諸彦の汚慈悲厚き御介抱モシ船夫さん有難う御座います(船)如何して〳〵禮にやア及びませぬ年中此船で渡世をそりや乗込むお方が此方の金函縦令自分の船ぢやア無エゑしろ難船ずりや助け合ふが互の事だから別ゑ苦勞も何んゑも無エサ然しお前さんハ幸へゑ知己のお方が乗り込んで厶つて好都合サ(花)誠ゑ是れが地獄で佛嬉しい事で御座います其れゑつげても清(市)ア、モシ急た處が仕方がないから只何事も落着て、皆さん嘸お喧ましう御座いませう

第廿二回

單表上州碓氷郡横川村ゝ近時開きし生糸商あり主個ハ糸屋半右衛門とて年ハ三十前後あるべく以前ハ八王子の者とのみにて其素性だゝ知る人なげれど主個半右衛門ハ蠶種紙と仕入れて是れを横濱へ持ち行き遂ゝ巨万の利潤を得てより横川村ゝ本宅を置き其身ハ横濱の町藝妓お芳と云へるゝ馴染を重ね贅澤ゝ日を送りしが頃及元治元年の秋お芳を始め四五人の藝妓を連れて函根の湯治ゝ遊ばんと土地ゝ名高き福住の二階一室を借りうけ居たり同じ湯治れ客れ數も多ろる中ゝ下座敷の小室を借り居る女二人ハ年紀六十路と過ぎし老女と一個ハ二十餘りなるが或旗本の隱居ゝて名を妙信と喚ぶ者ゝして孫娘のお福と云へるが氣鬱の病と治療の爲め湯治ゝ來しとの觸れ込みハ嘘か實か玄ち齒の娘の縹致の良きゝ同家でハ評判とりくゝなるものゝ如何なる事ゝか入浴の外ハ更ゝ障子の外へも出ず然るゝ亦中廊敷ゝ三週間餘り滯留なすミルシムト云ふ英國商人が何時のほどゝか娘を親隙頻に戀慕したりし事ハ女れ方でハ知事あかりきろも此母子ハ旗本の老母と孫とハ嘘りゝて遣ハお市お花の両人なり一日お市の妙信ハ壁と低めてお花ゝ道ふやう(市(モシお花さんェ去年の冬お前さんを駿府へお連れ申した後清吉乾盃の生死を索れども更ゝ手がかりのあいと云ハ全く御死ゝあされたものか生て御座らバ卑妾の内へ訪てお出あされねばならぬゝ半年餘りと過ざてさへ音沙汰せぬハ歎かハしい案事が眞ゝなつたれか其うへお前さんも夫れや是やで兎角ゝ加減が悪ゆゑ無理ゝすゝめて湯治ゝ來たも人込み多い場所なれば萬一乾盃の事が分らうかと一ッハ憑みゝして居ますが未だ是れといふ手懸りもなく實ゝお前さんのお心を察しますとお氣の毒ですが夫れゝ就いて妾の思ふゝハ此上ハ何んでも横濱か江戸へ出かけて然うして成るたけ人の眼ゝ注くやうな事をして華美を飾ると自然と江湖へパッとなり乾盃の方で其れと知り訪てお出でなさるだらうと思ひまと其首でモシお花さん是りや妾の口からいふ相談でハない元のお市の腹ゝなつてお前の爲めを思ふて云ふのですが那の中二階に泊つて居る髯さんハ英國とやうの人で横濱ゝ居るミルシムといふ大商人何んでも過般からお前を見て大層執心の樣子ゝて枕の伽ハせずとも宜いかゝ商館へ來て呉れる事ハ出來ないだらうか相談として呉れろと通辨へ頼んで居るといふ事ですがナンと茲ハ旗本の隱居と云つた頭巾を脱ぎ甘く取入り商館へ身を落着て乾盃の生死の所在を索るが上分別と思ひますト

サ是れハ妾ハ勸めませねどお前さんの胸れ括り一ッで操を破らす身を立てる考案があらうと妾の尋思お氣よ入らずバ聞流し〳〵（花）お前のお云ひも道理でそが妾も元ハ武士れ娘日本人なゝ知らぬい事如何もアンお異人さんよハ（市）サア然うであらうとハ妾も推量近い比喩ハ横濱の岩龜とやられ娼妓が異人さんゐ抱かれるが厭だと歌と詠んで死んだとやら況して以前ハ武家育御道理ぢや〳〵モウ〳〵何も申しませぬお氣よ觸つたら御勘忍下さい（花）妾れ爲めを思ふて云つて下さつた事何んの悪しう思ひませう（市）夫りや然うと今の内よ一浴行きませうか（花）然う云ませう〳〵」二階座敷ハ半右衛門がお芳よ酌ととらせながら（半）オイなんでも此下座敷とかよ大層美人が滯留すると云ふ事だがお前衆ハ見たか（芳）ハイ一寸昨日れ朝見ましたが實よ田之助のおとみそつくりですヨ（半）夫りや中々れ上製だが何卒見本を拜見をして一枷よりが掛度ものだ（芳）アレ〳〵旦那今湯上りと見ゑ樣先で髪を撫て居ますから一寸御覽（半）ドレ〳〵と手すりよよつて見下す顔ハ下なるお花が前よ置く鏡へあり〳〵（花）ヨヽ其方ハと見上る顔を二階の客も倩々視て（半）オヽ其方ハと云ひかけて喫驚思ハず後送り中二階よてハミルシムが前刻より半右衛門の動靜を窺ひ居たりけり

第廿三回

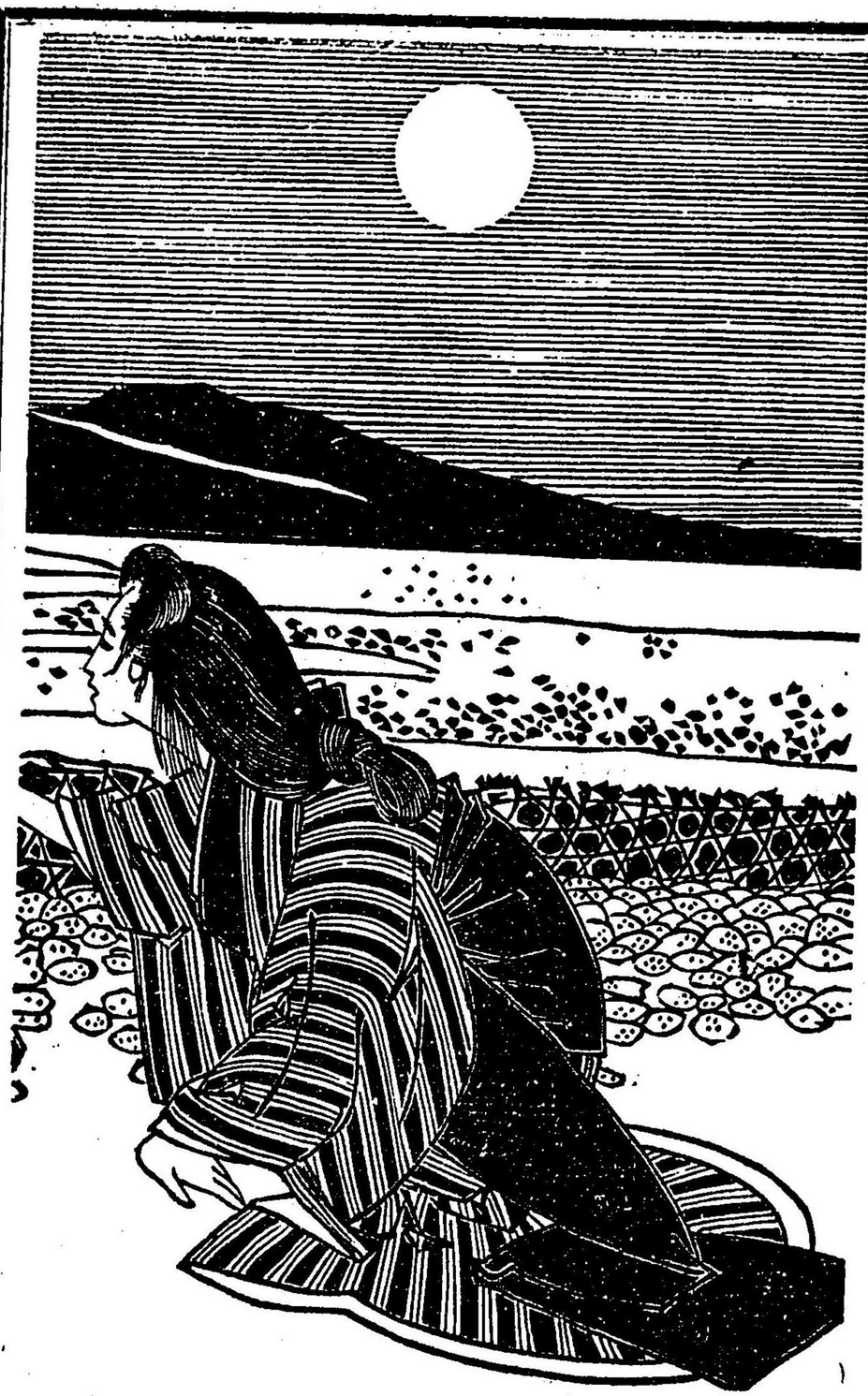
日もはや西よ入相のかねて巧計のある事よか馬匂川原の東岸へおろす二挺の驛駕籠より出つるお市が四邊を看廻し（市）オヽ舁夫さんハ苦勞であつたソレ酒代（駕）モシれ婆アさん是ッばかりの端酒代ハ入りやせんから姐さんを私等よお呉ンあせへ（花）其樣なゝお前衆ハ婦人だと思つて强迫氣だな（駕）强迫も何もしねエ或人ゐ頼まれて首尾能茲まで連れ出したのダ（市）何んだと人よ頼まれた然うして誰れが頼んだのダ（半）オヽ他でも無エ已が頼んだれだと屏所を出づるハ福住よ滯留なしたる二階れ客上州商人半右衛門お花ハ見るより再度喫驚（花）オヽ其方ハ跡部伴藏今日福住よて測らずも鏡の面ようつりしハ紛ふ方なき汝ゆゑ直ぐよ名乘て討たんものと思へど女の軟弱さよお市どのへ相談なし躊躇うちよ其方ハ出立したと聞いたるゆゑ追蒐け來たりし此川原舁夫どもの噂よてハ左樣な客ハ通らぬとれ言辭を信じ待つたるが原來ハ舁夫ハ疾くよりして其方に荷擔人あしたるよな（市）お花さんより委細ハ听いた父公の仇の伴藏とやら痩腕なから刺墨れお市が屬て居るからハ（花）父さんの仇サア尋常よ勝負をせよト詰よれバ伴藏呵々と打笑ひ（半）了得ハ戸田の娘だけよ小癪な事と

能く云つた大方連れゝ清二郎と思ひの外な婆ア一人特よヤア以前の紫痴肌をバすつかり脱た洗ひ髪粋な姿と二階ゟ見合す顔ゝお主ゆゑ俄の用事と福住を立つて同伴をバ濱へ歸し己ゝ殘つて雲介を頼んで甘く釣寄せたゝ死ぬほど惚れたお主だから口説落して抱寐をする

よ清二郎が居ちやァ面胴と斯う手配をして見たが婆アだけなゝ大業だつた（花）父さんを殺した耳あらず歸參れ種よあるべき金まで奪ひ取つたる大悪人听くさへ最ど穢らゝしいサア勝負せよ跡部伴藏（半）以前れ跡部伴藏ゝら大小の手前立上つて勝負をしてもやるだらうが今でゝからりと武士とすて糸商人の儲け算段命の賣買ゝ眞平だ縱また太刀を合せてもお主の様ゝ美人をゝ殺そ心よなゝれやうか其様な時代な事を云ゝす清二郎の縁がきれて居るなら諾と云つて伴三の女房よあれコレ花敷（市）傍若無人な其言辭お花さんやつゝけて仕舞おさい（花）サア覺期しや（半）オット何つこい然うゝ切られぬ狸婆アが餘計な口添最此うへゝ詮方がないソレ皆の者手傳つて（鵲）オヽ合點だと雲介傍が大勢各手よ得物を引携げ両人の女を取圍めバお花ゝ頻よ心焦ち目的敵の伴藏をと惱れど軟弱き女の腕ゝ市も夫れと察するものから命知らずの暴漢が殿たんとするを支ふる爲め働きさへも自由あらず然れども元來氣丈の女眞先よ居し雲助の持つたる棒を奪ひとり前後左右よ振ゝまゝせバ少し避して退く隙よゝ花ゝ突ッと駈け行きて伴藏よ切つてかゝれバエヽ面胴なと右手の腕を睨を掴んで短刀もぎ取り帶の上ゞ解くより早くゝ花の兩手を縛るを見るよりゝ市ゝ堪ゝず助けんとする必焦つて傍らの木の根よ躓き仆るゝ處を大勢よつて滅多うち遂よ其場へ氣絶をおしぬ

第廿四回

（半）オヽ皆の衆御苦勞であつた是れかゝ後ゝ已れ料理ソラ約束通り骨折代（雲介）ヘイ〳〵有難う厶へやす、サア歸らうと雲介傍ゝ元來し途次を引かへす影見送りて伴藏ゝお花の傍へさし寄つて（半）コレサ花敷さん如何した強情ゞ成るほどお前の爲めよゝ親の仇とか何んとか思ふだらうがお前が今茲で何んなよバたついた處が遂ッ着かねェ手向ひゞ已が一寸觸つてさへ直ぐよくたバる樣お婆アと力よ仇討何んかんと時代な事ゝさらりと廢め今うら已の女房よなれば連れて歸つて結構お身分コレ此伴藏もな今でゝ帶ーたる大小棄て立派な交易商人の大富豪となつて居るからお前が得心をして女房よなりや已が爲めゝ師匠なり舅ありれ戸田孫四郎殿の仇ゝ討たせるオヤ其仇ゝ已だつゞアハヽヽ非除仇ゝ討たすともお



前の身を安樂よ養ひ夫婦の中に擧た子よて戸田の家と立てさせたならお父公が其方ハ大欣びだぜ其れとも何うでも否と云や可愛さ餘つて惡さが百倍とサ芝居で能やる色敵夫れも餘んまり感心ーあい諾と云なせへ諾と云ひなせへ（花）ェヽ濟らはしい其言葉假令身體自由あらず此まヽお前の手よ糴り殺さるヽとも怨の一念やはか散さで置くべきか（半）イヤ中中よ强張ゞ夫れぢやァ何うでも女房よある氣ハないか（花）親の仇を目前よ見あがら討ち取る事も出來ぬかェヽ情ない遺憾や（半）然う意地惡く吐かすなら此方も以前れ伴藏になつて一番暴仕事手足を縛つて自由よあらぬと自由よ己が姦淫だうへ命と斷つて酒匂川原の露とするから然う思へ（花）已の樣な人非人よ死そとも肌身を嬲されやうか（半）其惡口も利けあいやうよ斯うして置くと手拭よて早速よはませる猿轡アレヨと叫ぶ聲さへも憾ハぬうへよ人里離れし川原中央の事あれバ何んと詮方涙より身と濺さ玄と悶くと押へ吾情慾を遂げんとそる伴藏が頭のうへを轟と響きて何處よりかハ飛び來る彈丸側の松よ忽ちまたも筒音高く射つ鉄砲よ膽を消し原來ハ四邊よ人あるかと思へば太く恐怖を懷きお花をすてヽ遁げ去りけり怎る處へ彼方より鉄砲片手よ靴を雪らせ此の場へ來たるハミルシムあり驚てお花の

後樂また縛めの繩を解き劬りながら側らお氣絶なしたるお市をバ抱へ起して懷中より藥を把り出し口にふくませ胸を撫下げ撫で擦る其の介抱を見るよりもお花ハ嬉しさ比喩んものなく傍へ立ち寄り俱々よ介抱去ながら耳よ口寄せ（花）お市どのお市どのと道ふ聲通じ稍くよ眼を開いて（市）オヽお花さんお前御無事で御座いましたかオヽ貴郎ハミルシムさん如何して茲へ、然うしてお花さん那の伴藏とやらハ（花）サァお前が氣絶をした後よ妾を茲へ押倒し既んでの事よ此身をバ濺さうとする其處へ此異人さんが鉄砲を射した音よ喫驚したのか妾をすてヽ遁げ去つたが現在親の仇をば目前よ置きながら取り遁がしたハ諄々も遺憾なれど肌身を濺さぬハ未しもの僥倖夫れといふのも此お方のお庇護其のうへよお前を介抱して（市）實よ嬉しい有難いモシれ花さん今日お話しヽた異人さんハ此れ方の事でゞ座いまそ併しマァ禮をいふよも何をいふよも互よ言語が通じますまい（ミル）貴婦、私しと一途よ來る宜しい（市）何ハ兎もあれ此れ方と一途よ往つて其うへの事（花）只伴藏を取遁がしたハ遺憾あれど交易商人よなつて居るといふかゞ一旦此異人さんを頼を横濱へ云つたうへ渠奴の事も清吉さんの事も（市）其決心が宜しう侍座いませうと兩人ハミルシムの後に屬ひ小田原道

を投して行きぬ

第廿五回

お花お市の両人は闘なくもミルシムの救助と得て難と免れ倶よ連られて横濱まで來りし後通辨の者より様子と听よミルシムは糸屋半右衛門と名乗て福住よ逗留しゝ客がお花の顔を見て遽よ出立したるは心得難しと思ふゆゑ其身も短銃を携へ直ぐに同人れ後よ属ひ窺ふよ案の如く酒匂川よて不法の働きをなさまくそる其体裁に躊躇はならずと威しの爲よ砲發して助やりたるなりと判りしよぞお花もミルシムが深切と謝すよつけお市が兼ての勸もあれバと一日通辨よ頼み其身は所夫ある身の上なれば枕の伽は出來ねどもお傍よ在て御介抱をなし此御恩よ酬ひたしとミルシムへ云入しよミルシムも大よ欣び聽てお花お市は館内の別宅よ住居させ何くれと劬りしが元來容色美麗なるれ花なれバ忽ちよして港内よ評判高く特よ は潤吉の生死を索出だすよは以前の近己よ邂逅するよ及ずと思ふより開業店の贈りビラ或は劇場寄席抔の人寄り場所へは凡常より一層目よ立つ贈り物をして專ら華美を飾りしよぞ洋妾お花と名も高く知らざる人のなきゐどなりき然るよ館主ミルシムは遽よ本國へ歸る都合となりし其子細を聞くよ未だ當時は蠟種紙及小判等の賣込みは制禁なりしかど利よ趨るは商家の慣ひ同港本町二丁目の兩替商富士屋才助は密よ之れを賣込み居たれど元來改所の嚴重なれバ容易は出來難きを種々の謀計よて賣込みしよ近時漸く密賣ある事を取締よて聞知り專ら探偵なりとの風聞ゆゑミルシムは最早長居は爲め惡しかり一旦本國へ引揚ぐるよは及かずと偖ころ茲よ至りしなれ聽てお花お市へ手當を渡し竟よ横濱と引き揚げし後お花はお市とゝもに同港石川よ借宅して商館よて馬丁なりし文吉といふと傭ひ今は洋妾にてあるねども華美を飾るは以前よ變らず之れ皆潤吉の生死如何と索出ださんとの計畫なれど未だ再會の時機來らざるか或は此世よ亡人となりしか更よ手懸りなかりしが恁る所行ゆゑミルシムより惠み與れし金も盡き負債さへも少あからねば元來内氣のお花の心痛是れうら向は如何しやうとお市に問へバ其首は然る者膝を進めて低聲よなり（市）潤吉乾盆の御意見よて斷然改心とした妾あれどお前さんと乾盆よ渡すかまた萬々一乾盆がお沒去あされた事あれバ歴然としたお人を頼み父公の仇を討たせまする所存ですかゝ何うせ向のない此白髪首を資本よ一番狂い狂言の脚色をしやうと勘考て思ひついた事もありますが何うも卑

妾でハやり悪い計畫お前さんも乾盃よ逢ひ倶々よ父公の敵をお討ちなさるまてハお樂な事でハ行きまそまいから茲ハ一番卑妾を後見よして一狂言モシ儲ける所存ハありませぬか(花)何んな事かハ知らないが妾の樣な無機用者でも出來る事なゝやりませうが他し男と寐るだけハ(市)ハテ其樣お事ハお勸め申しません卑妾の勘考た一件ハ否應なしよ二三百の金よなるのハ屹度保証其狂言とハ是れ恐覽あさい(花)コリヤ昨日買つた鮭ぢやありませんか(市)サア其鮭が儲けの種(花)其りやまた如何して(市)お聞なさい斯いお都合サ

第廿六回

茲ハ横濱本町なる富士屋と云へる両替店の暖簾を潜りて入り來る両人の女ハ小腰を屈め(花)御免なさいまし當家の旦那が御宅でムいますなら一寸お目に懸り度御座います(手代)ヘイ主人ハ宅よをりまするが然うして貴卿ハ何處から(花)ハイ商館よをりました花と仰しやつて下さいますれバ御存じで御在います(手代)左樣で御在いますかマツ〳〵何卒お揚りなされませ(才)イヤ是れハお花さん誠よ珍らしいオヤお市さんも一途か能くお出だ此首ハ店頭だからマア奥へ(花)旦那誠に御無沙汰を致しまして相濟みませぬ(才)何うして〳〵御無沙汰ハお互さまミルシュ樣か歸られてから別よお訪もしませず毎度取引の度よハ種々と御厄介よなりましたが其後ハ何處よ居なさるノ(市)ハイ只今ハ石川よ居まして只遊で計りとりまする(才)オヤ然うか不私ハまた國へでも歸んあすつたかと思つて居ました毎もながらよ美麗いチエ(花)旦那何んにも驕りハしませぬヨ(才)商館の娘連ハ云ふまでもあく町藝妓よもお前さんの樣な美人ハないとの評判々然うして私しよ用と云ふのハ(市)旦那ハ御存ぜの通りミルシュさんが歸つた後ハお花さんも妾も丸で坐食黄つたお金も消費し今ぢやア借金の淵よ沈み浮む瀬のない此體夫れゆゑ両人が協議して何卒旦那よ御無心を願つて見やうと參りましたが當節柄の事ですから何程御懇意の間でも抵當なしでハ申し悪いと貴郎の方でハあくて慨ハぬ二ッの品を持つて來ました御無理でハありませうが以前かゝのお馴染甲斐に多分な事ハ申しませぬから情願お貸なされて下さいな(才)成ほどミルシュさんが歸つた後坐食でハ堪りませぬ多分お事ハ出來ませぬが何うともお補助ハ致しませうハテ抵當品よ及びませぬ然うして額ハ何程です(花)ハイ三百両ハ借り申したう厶います(才)エー三百両(市)モシ旦那へ只借りるよやア三百両ハ些と大業よ聞こなますが此抵當を見なすつたゝ三

百兩でも宜う御坐いますぜト云ひつゝ携へ持ち來たりし包と解けば鹽鮭一尾上ゑ乘しゐ古手東(才)此の鹽鮭と古手東が三百兩れ價ですか(花)旦那途惚戯ちやいけませんヨ今ぢや大勢店の方を列べて立派ゑ兩替店一時ゑ伸びた身代の利潤の基ゐ此鹽鮭檢査苗の眼を瞞着し鹽でくるんだ腸ゐ鮭にゐあらで山吹の(才)エ(花)御制禁の裏を行く其賣買の種紙と棄そゑ置いゑ此手東名宛ゐ富士屋才助樣鈴木屋與助と名と記し中の文句の一字一兩三百字と見て三百兩れ借り申し度とれ頼み申すゐ無理な譯でゐありますまい(市)ミルシム樣の館ゑ居て何不自由なく暮す時ゐ旦那の方へ御無心に巻る積りもありませぬから別段ゑ賣込みの部分の事と云ひませぬが今日頃日の手詰りから據ころなく巻りました那時部分を遣つたと思ひ素直に貸してれ呉ンなさい(花)夫れとも貸せぬと仰しやるなら詮方ゑしの公儀沙汰何程暖簾がゑじ屋でも餘んまり樂ぢやありますまい聞けゞ當節浪人が此横濱へも入り込んで交易商人を取調べ天誅とやらゑすると云つて拽して歩くと云ひますから其樣な方へでも知らせたなられ氣れ毒がだ旦那の首が(才)ヤ(花)モシ才助さん店れれ來へも氣の毒です知らさず貸下さいナ(才)宜しい三百兩貸ませう(市)其れぢやァれ貸なそつて下さいますか(才)其代りゑ其抵當品ゐ私の方へ受取りませうサア三分一分取交だが三百兩あります撿めて受取りなさい(花)旦那誠ゑ濟ませんが是れも手許が苦しいからでそ(市)丁度三百兩確かゑれ申借しましたサアれ花さん長居をしちやァれ店の迷惑直ぐ歸りませう旦那段々有難う御座いますゝれ近々れ禮ゑあがります(才)イヤもう夫れゐれ及バない(市)オヤ其樣ゑゑ怖い顔をなさいますな(花)如何ゑ考案ゑ盡きれをとて世ゑ淺ましい强迫騙術(市)ハヲ聞こゑますヨ靜ゑお云ひなさい(才)小僧鹽花で跡を清淨ろ〳〵

第廿七回

世路ゐ流るゝ水ゑ似て澄も濁るも其人の心々ゑ因るとかや戸田孫四郎の女花敷ゐ刺墨ゐ市の曲尺ゑて富士屋才助方より三百兩を强迫取しも畢竟父の仇を報ぜん爲め其人清次郎を索出だしたしとの精神よりしてなしたるとゐ云へ誰か孝なりと賞し貞ありと譏すべけんや之れ單ゑ澄む心のうちゑありて一朝泥砂の爲めゑ流通と塞ぎ濁りを來たしたりと云ゐまくのみ今日ゐお市も外ゑ出でお花ゐ一個火鉢の傍ゑ過去未來を思ひつゞけ尋思ゑ胸をとざしたる格子戸戛然と押開ける音ゑお花ゐ聲とかけ(花)誰れだエ(文)エゝ私でス(花)オヤ文吉か

サア揚ンお何處へ云つたのダ（文）其れぢやア御免なせへ今日ハ神奈川まで職業があつて往つた歸りでス然うしやお市さんハ如何しました（花）今しがた本町まで行くと云つて出懸けて云つたヨ（文）其イッア丁度幸へ（花）何がエ（文）イエ其りや外の事テ、時ヨお花さん誠ヨ毎度濟みませんが何卒少々願度ものでそエ（花）オヤ又無心か、極り云つてるヨオイ文さん能く勘考ても御覽お前も知つて居る通り旦那が國へ歸つた後ハお市さんとお前と三人で坐食としての食繋ぎハ食客で居たお前だかト能く分つても居るだろうが妾も若い身體だからお前が居てハ左や右くと人の噂も蒼蠅ので先達て宅ヨ居るを拒絶ると三日ヨあげず一分貸せイヤ二分貸せと際限なし妾だつてありさへすりや貸てあげるを厭ハないが今聞く通りの世話場だから其樣なヨ續くものでもないから最無心あろう宜加減ヨ何卒切りあげて貰いたいヨ（文）成程コリヤ御道理三日ヨあげず蒼蠅來られちや御迷惑と知て居ヤス併し私もまたお前さんの樣ヨ高々百か二百までの雛と遣つて三百兩（花）エ（文）ヘヽ跡ハ云やせぬ一分や二分ハお利足の端錢位と思ひますのでッヒ厭ふれヨ來ますのサダがれ花さん私も館ヨ居時分二三度確ヨ見認て置いたハ那の富士屋の才助が鹽雛の腹を割て小判と入また其腹を縫ひ合せ館へ持ち込み抜賣で大した金を儲けたとハ知ちやア居れど今となつてハ証據が無エから其事を云ひ立て行く場合ひもおく愚圖〳〵するうち抜がけの鹽雛ヨ添へ切ッ端の手東の証據ヨ引き出したれ前の腕ヨやア駭いたぜ然しれ前ヨ云つて置きやすが此一件ヨ付き富士屋かト小判を雛の腹ヨ詰め込んだやうな鼻藥が所々へ廻つたので富士屋の方へ御沙汰あしでれ前さんとれ市を引きあげやうとする相談のある事を听きやしたから隨分ご用心なせへまし、モシ此話バかりでも一兩の價値ハありやせう（花）其りや能く知らせてれ呉れであつた成ほど然う何も角も知られた日ヨやア別ヨ隱しも何も云ない察しの通り富士屋かト三百兩ハ借り出したれど知つての通りの借主へふりまいたゆゑ跡ヨ殘るハ漸く五十か七十ヨて燒石ヨ水で何んの益ヨも立たないが正可ヨ二分や一兩でもまだ苦しも爲あいからマア是だけでも持つてお出で其うちヨお市さんとも相談して今れ知らせ貸ハ出してあげるヨ（文）何より是れハ有難へ其れ代りヨやヤ今の事アまた聞き込んだら一一ヨ御注進ヨかけ込ミやせう（花）オヤ誰れだか來たやうたが（文）私が見て來やせう（手先）御用だ（文）南無三大變モシお花さん來ました〳〵、アイタヽ、私ヤア何も知りやせぬ強迫としたのハ茲の主個の（手先）

れ花御用だ神妙よしろ（花）ハイお手向ひハ致しませぬが少し身嗜ミが致し度御座ります（手先）早くしろサア文吉手前も一途よ行くれた（文）コイッア災難飛んだ日よ出ッくわした

第廿八回

こゝ住吉の佃節を是よも引いて御前なる松の調よ打通ひ颯々れ聲日盛りの暑さも今ハ吹はらえバ夕涼かけし川並がえんやらやァれ調子ゐも夜景を催す一端よて眺めもいとゞ深川の快樂卿よ富ケ岡八幡宮の裏手なる料理ハ一か二軒茶屋其昔時より幾年も替らで桒ふ松本の奥の坐敷よ酒宴を開く客ハ頻よ聲高く（半）コレ菩八貴様も此仲町の幇間をして居るから粋も紫痴も噛分けて知つて居るであらうが茲よ居る藝妓れ大和ほど頑固らあい女ハあるまい已が聘のハ昨日今日でなく上州から横濱へ通ふ度よハ大和の顔が見度バかりで江戸の逗留始めのうちハ人頼みをして口説たが容易よ諾とハ云ひ想でないとの事ゆゑ後ハ己が直さよ云へバ風よ柳とうけ流し得心しないも無理でハなく當地の木場の材木屋ゐ奉公として居る年季野郎久七とか云ふ奴と深くなり夫れで諾をハ云ハぬのぢやと遂々狗よ嗅ぎ出させハしたがソンナラ然うと手と引いてハ已も上州横川村で人よ識られた糸屋半右衛門ゑ仲間の奴へも面向が出來ないから假令抱かれて寐までも根曳をして手活の花本人よ否應のないやうよコレ見よ抱主の八幡屋の主人よ身購金三百両と取極め手附の百両ハ渡して證文ハ此通り夫れよ先刻から碌々よ挨拶もせず鬱いで居るハハヽァ大方何處で丸太野郎と口説をしての愁嘆であらうコレサ大和二両や三両のくすね錢で喰つけぬ會席膳の奢りをとる野郎れ事を思ひきつて半右衛門の女房よあれ聞けバお前も呉服町邊の立派な商人れ娘とやらまた妹ハ吉原の娼妓よなつて居るさうだがお前が已の氣よ適うやう欵待てさへ呉れたなら其妹も籠とバ出して自由れ鳥夫れも是れもお前の心一ッだ最う何んと誰れが故障をいふても抱主から此通り證文を取つて置けバ大丈夫何んと世の中よハ慾を知らない奴もあるものサネヘ（善）否々夫れハ旦那のお鑑定違ひ大和さんゐ限つて其様ゐ浮氣ハ御座いません混物なしの一本立ち極純粋な辰已の校書（半）何をまた同穴の狸が喧ましい何程已が田舎漢でも虫があるかないかハ知つて居る今日も其虫ハ此松本へ來て大和の傍を飛んで廻り無作法よも人の座敷と覗き込む青二才虫何んなよ翼とバたつかせても黄金虫よハ追つくまい夫れとも男らしい處があるなら茲へうせろ捻り殺してやるぞ（大）アヽモシ半さんお前もマア餘計な口ぢや

ありませんか假令年季野郎でも妾が好て妾が惚れたゝ誰が何んと云ひませう末ゝ夫婦と約束れ辭を反句ゝしないのが藝妓の意地といふものです何程お金を積まれても否だと云つたら根奈落得心せぬのゝ是れも意地拘の身の悲しさゝ其樣な證文ゝ出されたが本人の妾が否で御座んす夫れとも身購をするのゝら死骸を持つてお歸りなさい（半）オヽ能く云つた死骸であれ骸骨であれ己の方でも男の意地是非とも前ゝ購身して連れて行くかゝ然う思へ併し斯んな事を知つたゝら無丸太野郎が腹と立てるであらうなと聞こえよがしゝ喇弄するを先刻より次の室ゝて覗ひ立ち听く久七が悔しさ限りあらざれゝ飛び出さんとそる景狀をゝと見てとる藝妓の大和（大）アヽ惡いコレ決して短氣ゝなりませぬぞ（半）何んだ何が惡いのだ（大）エヽサア妾ゝ胸が惡いといふのサ（半）何か喰物でも惡かつたか（大）否エお前の顏を見たゆゑゝ（半）コノ婀魔メ（善）オッと旦那茲が戀路の耐忍處です

第廿九回

春の餘波も早晩ゝ散りて若葉ゝ路闇く茂る樹立の空ゝ啼く死出の田長の聲さへも身ゝ詰されて血を吐く思ひ涙ゝがらに漸々と辿り〳〵て兩人ゝ曾て覺期に向嶋堤ゝ行み顏と顏（久）

逢ひそめてゝら一日でも便りと聞かねば氣ゝよゝり互ゝ深くあるゝつけ濟まぬ事とゝ知りながらッィ筆先の融通算段夫れも如何やゝ償ひが出來る目的もある處へアノ糸半が卿をば身購しやうと云ひ出したが意氣地とあつて無理な逢ふ瀬藤堂樣の御下邸から御下げゝなつた百兩を私費た事が露顯して管伴さんの嚴ーい詮議今の御主人ゝ私ばかりか本郷ゝ居る爺までが大恩うけたゝ家なれゝ不忠のゝいやう勸めをしろと平常爺ゝ云ゝれるゝがら藝妓ゝ狂つて斯々とゝ何うも爺へ話しも出來ず所詮死ぬゝより外ゝゝいと思案を定めた此久七卿ゝ深川仲町で今流行妓と云ゝれる身分材木屋の手代とゝもゝ情死したと後へ浮名を流すゝ譽めた譯でもないゝかゝ茲から早う歸るがよい（大）またソレ不實を云ゝゝやんす如何した緣が去年春松本さんで大勢一坐醉潰れたのを貴郎が介抱其の時ふつと念そめ月下氷翁の媒介で夫れから後ゝ人目を忍び逢瀬も繁く片時も忘れゝれない戀しさゝ末の事まで約束の起請ゝ嘘ゝ御坐んせぬ妾も今でゝ此樣ゝ卑しい藝妓渡世あれど以前ゝ屋鋪勤めをして少しゝ義理と人情を辨別てもをりまそる妾ゆゑゝ御主人や父公へ濟まぬ身となつて切迫詰りし死ぬ覺期を聞いて然うかと其まゝに何う存命て居られませう特ゝゝ今の養母ゝ那の糸半の金ゝ眼

が昏れ是非とも身購させるから得心しろと云いれて見れば抱主なり否とも云へず諾とい言へど心でハ素より妾ハ那的の所へ行くあら死ぬと常から覺期只氣がゝりハ吉原の妹が是れを聞いたなら嘸嘆く事で御坐んせう父さまハ非業の御最期母さまよもまた續いて御病死殘る親族の伯父さんが惡計ゆゑよ妹も妾も斯んな勤めをする身とあり互よ親とも姉妹とも便りよするハ只ダ二人夫れよも聞かせず死を遂げる是れぱつかりが悲しけれど夫れよも見かへて貴前とハ一途よ死なうと覺期の妾不實な事と云ハないで何卒未來へ倶侶よ(久)其れゐどまでよ此久七と思ふて呉れるか忝けない吉原よ居る妹公が嘸や跡にて久七を怨まつしやふうが是れも因緣其の分疏ハ冥途から(大)斯ういふうちよも追人が來るかまた往來れ人よでも見認けられてハ互の大事(久)如何さまを茲と定めたる覺期ハ清く隅田川(大)明日ハうき名と流す身も(久)切てハ御主人と爺様と不忠不孝のおわびを一言(大)妾も今の養母さんと妹へ迴よ心の詫と互に須臾掌を合せ涙よくれて居たりしが折ふら擡き出す淺草の鐘ハ川面瀨かすめ來て耳を貫き(久)オヽ恰度幸ひ今鳴鐘を引導よして大和覺期ハよいか(大)アイと互よ掌を掌を把り眼を閉ぢて倶侶よ咄嗟藻屑とあらんとす(正)オットドッコイ待つた(勘)若衆待ちあせへ(久)誰殿か何うぞ放して下さりませ(大)モシお慈悲で御坐ります見遁がして殺して下さいませ(正)イヽヤ見遁せねエ何うした仔細ろア知らねエが已の眼よついたからよや滅多よ殺せぬへ勘七女を睨り押へろ(勘)大丈夫です(正)マ何しろ事故も聞き度が茲ハ往來で話しも出來ねエ直き此向よやア已が懇意な宅があるから右左く其處まで來るがいヽ、ハテ惡いやうよやア做無エからコレサ然う强情よ死よたがらすと兩人ともマア來なせへといふよ

第三十回

世をうし島の離れ家四方ゐ圍らと建仁寺垣庭の樹木も風雅を旨とし式に適ひし好みの茶室花散る春の曉きより雪よ友訪ふ冬の夜まで四季の眺望ハ飽きやらぬ該家の主個ハ或藩れ茶道の隱居と云ひ觸らせど其本業ハ内會師岡村龍達とい ふ者なり茲れ坐敷を借りうけて助け來たりし男女よ對ひ(正)年紀と云ひ姿と云ひ先づ情死の通り相塲夫婦よなれぬとか金がないとか孰れよしても大切な命を安い相談から塲所も極りの向嶋と出かけて來あすつたのでありませうが去りとハ惡い了簡だ死なうと思ふ程な決心があるなら何んな六ヅかしい苦勞

でも耐忍の出來ネエ事い無エ私い東両國の阿波屋正兵衛といふ小問物商茲の家とい親類同樣交際として居まそゆを相談があつて出かけて來た路次恰度甘蝋梅よ見認げたい未だお前方の命數れ盡きないのだから一体何ういふ譯で死ぬのか私よ話て聞かせなさい仕誼よよつたら私も男惚力よなつてもあげませうまた所詮出來無エ相談なら元れ所へ連れて往つてドンブリの手傳ひ最う斯うなつたからよや遠慮よやア及バ無エ事故を話て聞かせなさい(久)御深切なる其お辭難有う御坐ります何をお包し申しませう私しい深川木場れ材木屋江嶋屋の手代久七と申す者まさ是れい仲町の藝妓八幡屋大和と申しまそるが不圖馴染よなりましてより來の事まで約束とした其中も今度上州の糸商人が三百兩よて此大和を身購するとて抱主へ百兩の手附を渡し本人が得心次第殘金を渡さうと切迫れ場合私しも大恩ある主人の金を私用すて今とおつていい分疏も不甲斐あい身い死ぬより外よ考案なけれバ覺期をして今宵他ながら暇乞をと出かけて見れバ大和もまた私しと添はれぬならバ死なうとの決心をしたと申しまするゆを無分別とい知りながら死ぬる覺期で御坐ります(正)若へうちよいありさうお情死話併しお前さんい親方への詫が慨ひまた姐さんい上州の客の方へ行かずよ此お方と夫婦となれる事なら死ぬよや追ふまい(大)何んな苦勞を致しましても厭ひい致しませぬゆを久七さんと夫婦よさへなられますあら死ぬる心い御座りませぬ(久)私しとても主人の前また爺れ手前分疏のある事あれバ死なうとの所存も起しい致しませねど今となつていい死ぬより外よ(正)其樣お事位で死んぢやア詰ら無エぜ萬事い私が擔當て命を助り往々い兩人の望も慨ふやうよ骨と折つて見やうから努ず短氣を出しなさんな今もお前が話だつたが父公が有ますか(久)ハイ當年五十二よ成まする久兵衛といふ爺が御座りまする(正)何んだ久兵衛さん然うして何處よお出でなさる(久)以前い四谷傳馬町よ相撲屋と申して呉服渡世可成りよ暮してをりましたが先年甲州から駿州れ方へ參りました節富士川よて難船よ遭ふた人を助けた時よ携へた行季をバ川へ流してしまい中よい仕切が五百兩餘りアレヨといふ間よ早瀬の爲め取り失ふたが運の盡き夫れから後い漸次よ損毛續き店も其まゝ人手よ渡り其うへよ名目金の取立て嚴しく爺い竟よ入牢よならうとするを今れ御主人江嶋屋の旦那がお慈悲にて無難よ濟みい致しましたが商業とする資力もなく今でい本郷春木町で人よ雇れ使歩行幽な生計でとりまする(正)其れぢやアお前さんい四谷傳馬町の相撲屋久兵衛さんの

御子息か(久)貴所爺を御存じで御座いますか(正)エ、否お父さんハ知りませぬが私の親族の者が其近邊よをりまするゆゑ兼て所いて居ましたが其樣なゝ其富士川とやらで失した金の爲めよ遂々身代が潰れましたか其イッアマア飛んでもネエ災難でしたチエ併し惡い後よやアまた善事れあるものだから苦世〳〵思ふよやア及バ無エ併し今夜ハ最う遲いゝゝ此の家に泊つて左右く明日の朝ハ話の宅までお出でなさい獨暮しだが不自由ハさせあい然うして私ハ御主人の方とまた姐さんの抱主へ渡りをつけて片を附けやうバテ心配よやア及あい(龍)委細ハ次で聞きました両人の衆も宜い人よ見認つて大僥倖イヤコレ正兵衛どの不思議な事があるものぢや此大和といふ藝妓ハお前が吉原で馴染で居る玉樓の花柳の姉ぢやさうあ(正)龍蓮さん貴所能く御存じですチ(龍)毎も華魁が噂をしたよハ深川仲町の藝妓大和といふハ妾れ姉と云て居たゆゑ耳ゐとまつて忘れハせぬ何と大和さん然であらうが(大)お察しの通り妾の妹で御座います(正)其イッア妙な出會だナア

第三十一回

夫れ深川の妓ハ文化文政度の昔一名辰巳の此土地の外よハ恰も歌妓あき如く其の繁昌の景況ハ故人爲永春水が作よ名高き梅暦辰巳れ園よ盡し〳〵通り實よ無較の一花街なりしも下つて天保寅年よ至り閣老水野越州が發議の御趣意よ仲町初め大新道、小新地、表櫓下、裏櫓下、家鴨新地、石場新田、れ所謂七場所とも一般よ取拉ひの命下りしかど忍ちさしもの辰巳の里桑田變じて海邊の貝賣名れみ殘りしも暫くよして二三の歌妓土地よ顯れ以前とハ比ぶべきにあらねども彼の娼舗の假宅よて再度花街の位置を占し慶應二年の春れ頃より八幡屋といふ藝者屋を開し主個六十路餘り漸く腰よ弓ハ張れど氣象も口も達者婆ア朝から晩まで小言の高聲(主婦)おひろや何をして居るンだチエ朝ッから猫いぢりハ止なヨお天氣の快うちよ洗濯ものでもしてお置きヨコレお玄やと姐さんが未だよ歸らあいがまた那れ久七と嬶曳だらうが眞實よ世話が燒きれあいヨ偶よやヤ情夫よ逢ふも宜がもう上州の糸半さんへ行くと極つた身で泊がけよ出掛けるなんどハ他の藝者衆へ對しても濟まないしまた妾の内だつて此土地よ古くから藝者屋をして居るといふ譯でもあいよ抱ゑ子が那んな不体裁ぢや妾が迷惑サお前夕一途なら何故歸らうと云ハあかつたンダヨト叱られて雛者のお玄やと(姐)だッて姐さんハ八幡さまへお詣りをして行くから先へ歸れと云つたから妾ハ新どんと一途よ歸

つたの(主婦)函丁の新公もまた茫然だヨ何程久七さんからお捻りが多分ヨ出るからと云つて大和と一人やると云ふ事があるものかユレおひろお前見番へ云つて新どんヨ大和さんを探しておくれと然う云つてお出で今夜か明日れ晩ハ糸半さんが入らッしやるかも知れないヨ眞實ヨ那の者の氣儘ヨも困るヨ悪い相談をするんぢやなし身購をされるのを欣ばなくちやならぬヨ藝妓の意地だとか義理だとか駈出しの癖ヨナヤをいふからヨ疳癪ヨ觸らアオイれしやとお前も那んな悪い事を見習ッて情夫など持つンぢやないヨ然うしてお前ハ今日松本さんでお畫かゝのお約束ぢやないか早くお浚をしまつて湯へでも行くがいゝよ何んだチエ生意氣あゐん結び抔拵へてまだ糸道もつかねエ癖ヨ其樣な事ア早いヨ、オヤ〳〵妙法樣のお燈明が片々しめつてゐるぢや無エか縁喜でもない些と氣をつけなヨオイおしやとお前今日小せんさんヨ逢つたら竺仙さんかゝ浴衣が屆きましたと云ひな夫れから善八が万一來たら先達ての燕枝さんのビラの割ハ何程ですか早く取りヨお出でと云つたとお云ひユレお坐敷で云ふンぢやないヨドレ一煙しやうと饒舌勞れて火鉢の傍煙草燻らし居る折から八幡屋大和と御神燈ヨ記せし文字ヨ茲ならんと格子戸明けて入り來たるハ久七大和兩人の惰死を禁めし正兵衛ヨて上かまちより聲をかけ(正)私ハ東兩國元町の阿波屋正兵衛といふ小間物渡世ですが此方の大和さんの事ヨつきまして少々御相談があつて參りました(主婦)オヤ〳〵大和の事で然で御坐いますか那妓も昨晩から未だ歸らないもんですから大層案じて居ましたが其れぢや貴郎のお宅ヨとりますろ漸と安心と致しました(正)まだ居るとも何んとも云やしエヨ氣の早へ婆アさんだと口の裡ヨて吻きながら隔障子押披き思ず見合す顔と顔(正)ヨヽお前ハ(主婦)オヽ貴郎ハ(おし)お母さんお湯ヨ浴つて來ますヨ貴郎御緩りと

第三十二回

互に顔を見合せて打ち駭きしも宜也哉八幡屋の主婦と云へるハ是れ刺墨お市ヨしてまた小間物屋正兵衛と名乗者ハ鬼清吉の來嶋清二郎あり先左右くもとお市ハ起つて二階へ請じ涙を泛め(市)マア〳〵思ひがけない處で乾盃ヨお目ヨかゝり何からお談話申さうやうト是れより前年駿府を立つて甲州へ赴き其歸途富士川ヨてお花と救ひし事また函根の事件お花がミルシュの妾とあり富士屋才助を强迫し竟ヨ召捕ヨありしまでの顚末を詳しく語りて再道ふやう(市)妾も内ヨ居るならバ倶ヨ御用ヨなる處を折節不在ゆゑ免れハしたれど强迫の罪

ハ同じ事お花さん耳を牢へ遣つてハ濟ない譯と思ふゆゑ直ぐよ自白て出やうとハ存じましたが再熟々と考案ますよお花さんも妾も一途よ牢へ往た時よハ乾盆の身の安危も知れず特よハお花さんの仇といふ伴藏を討つ者もあるまいから卑怯な譯でハありますが一旦免れて乾盆の生死を聢と突留めたうへ自由て出るも遲くハないと濱を立退き江戸へ來て此八幡屋の跡を引受け去年の春から藝者屋渡世多くの人の來る土地ゆゑ若しも乾盆よ逢ハうかと待ちよ待つたる甲斐あつてお目よかゝりし心の嬉しさ夫れよモシ乾盆未だ〳〵欣ぶ事がありまそるハ貴郎が今仰しやつた大和といふ藝者を身購の客糸屋半右衛門といふハ跡部伴藏で御座います夫れゆゑ故と大和と心身購させたゝ何かの都合よ宜き手がかりと思ひましたゆゑ慾の熊手よ釣り込んだ体で妾ハ顔と合しませねど身購の相談を致しました貴郎よお逢ひ申すうへハ妾ハお花さんが居るといふ横須賀の牢へ出かけ貴郎の無事をお知らせ申して出しませうが然うして乾盆ハ富士川以來何處よ如何してお居でゝしたと問へバ濟吉點頭て(正)死んだと思つたお花の身の恙ないとハ己も嬉しい委細の事ハ甲州へ往つたとあれバ承知であらうが富士川での災難よ既よ死なうとする處を藤橋の上から見つけたとて江戸四谷傳馬町の相撲屋久兵衛といふ商人よ救けられ漸と命ハ拾ひしなれど所詮お花ハ助らるまじ其生死さへ聞き糺したけれど何分詮議が嚴しいゆゑ據ころなく南鄕よ行き妙淨寺といふ寺よて供養をなし人目を包み駿府へ出ゝ當夜長州の浪人が入り込んだとて府中の町ハ宿檢めも嚴重ゆゑ迂架〳〵してハ身の大事と直ぐよ府中を立つたのでお前の許へも訪つれず折から持病の疝癪起り歩行も碌よ自由ならねバ駕を雇ふて函根よ行き塔の澤の湯よ二週間餘逗留し癒るをまちて當地へ來ると恰度甲府で別れた保科の虎また出羽の勘介よも邂逅ひ兩人の世話よて東兩國へ小間物店を開たが是れハ畢竟陽向其渡世ハ內會師已ハ阿波屋の正兵衛と名乘り藍玉商人と云ひ觸しまた勘介ハ勘七と更め己が宅の若イ者また保科虎ハ茶坊主の隱居と云ひ立て向屋よ岡村龍達と喚替て互よ往來ハして居れど片時忘れぬお花の事若一不幸で此世よ在ねば已の身體ハ二人前師匠の仇親の仇跡部伴藏の首を討つて位牌へ手向けやうと思つて居たが今のお前の話と聽て安堵ハすれど籠の鳥なる牢屋よ居てハ何時此婆婆へ出られるやら(市)ソリヤ乾盆お案じなさいますな其首ハ妾が胸三寸佶度お花さんハ免されて出るやうよ致します(正)成るほど其樣な仕事よハ馴れたお前ハ保証あら如何とも考案ハ

あるであらう又手久々の對面よて身の上話が前よあり肝腎の事を云ハないがお前と知らず今日己が茲へ來たのハ大和といふ藝妓よ就いての相談だが昨夜己ハ勘七を連れ龍達の所へ出かけた途よて若い男女が情死れ動靜を夫れと看てとつたゆゑ取押へて龍達方へ伴ひ行き て仔細を問へバ女ハ茲の抱えの大和男ハ木場れ江島屋の手代久七とやらいふ者だが身購の客が外よ出來て添ハれぬゝの無分別特よ男ハ親方の金をバ遣ひ込んだので分疎なさとの互れ話段々素性を洗つて見ると其久七といふ男ハ己を富士川で救けて呉れた相撲屋久兵衛どのゝ子息よて久兵衛どのハ己を助けた登時行李を川へ流し早瀬の爲めよ失ふた金ゆゑ竟よ身代も破産し今でハ本郷春木町よ家がない活計と聞いて喫驚己が當地へ出た時よ大恩人の事なれバ早速四谷へ往つたなれど轉宅をして先ハ知れずと近隣の人れ噂としたのハ手許不如意な處から無沙汰に住居を立退いたものか其後も寄々よ探して居れど聞き當たらぬ折から其悴をバ救げるハ則ち天の配劑であらうと両人ともよ己の家よ連れ歸り實ハ今江島屋へ往つて詫を云ひ入れると了得ハ大腹な主人だけよ二言と云ハず承知としたゆゑ先づ一方ハ片附て是れからハ女の方百両といふ手金まで受け取つてありやアオイそれと定めて承知をせまいから其時よやア威してなりとゝ尋思を定め出かけて來ると思ひがけない此れ面會今いふ通だが如何か考案ハあるまいか（市）如何の斯うのと他人らしい此商業として居る也貴郎の生死と知り度のとまたお花さんが牢から出た時落着先よと開いた店是れうら後ハ何事も貴郎の心任せよして宜いやうよ片とおつけなさいませ（正）然うなれバ若い両人の命と繁く耳なうず已もまた引受けた甲斐がある其れぢやア茲よ百両あるから系半の方へ手附と返すがいゝ（市）否々受取つた金ハ未だ其まんまありますから此御心配にハ迫びませぬ併し乾盆ニ今もいふ通り系半ハ跡部伴藏で御坐いますヨ（正）然う聞くうへハ片時も早うお花を牢かゝ出す考案と（市）夫れハ妾か承服ました其代りよハ跡の處を（正）如何いふ考案かしらねエが老人の氣の毒な牢あんぞへハ遣り度ないネエ（市）貴郎十年餘生延て居る此お市茲等が切りあげ處でさアチ

第三十三回

朝貌や廊の鴉ハ豆腐賣」寇よ曉を夢よして晝としもあゝ別世界離の名よハ聞こえたる玉樓の娼妓花柳ハ部家の客ハ臥房を起きねど屏風の外よハ女同士火鉢を中よ睦ましく（國）浮世

の事といふ者ハ眞實ヨ不思議あものだヨ深川ヨ居て久七さんと馴染をかさね義理ヨ迫つて死ぬる覺期れ其場を助て下すつた正兵衛さんハお前のお客で久七さんのお父さんヨ救けられたお人とやうまた妾を抱えた八幡屋れおふみさんと云ふハ正兵衛さんヨ以前使はれたるお方にて三方四方ヨ繁ざ合た縁ハ妾と久七さんが幸ひとなり糸半の身購も首尾能變改してお前の傍へ來てゐるが雛妓衆への手前もあり何んだう氣の毒ヨハ思ふけれど斯うして居ヨと正兵衛さんれ指揮のまゝお心なく厄介ヨハあつて居るが最う半年で久七さんも一本立ヨなれる身ゆゑ夫れまでの處辛ないが何卒世話とば頼みます（柳）アレ姉さんの他人らしい親なき後ハ姉さんを親と思ふハ子の道です妾が茲へ出た後も病氣勝ヨて勤めもあらねバお前の爲めヨなるやうな稼ぎをせぬと心ヨ愧ぢ何うかと思ふ折からヨ正兵衛さんをお客ヨした是れヨも不思議の譯がありンス（圓）不思議な譯とハ如何いふ仔細か（柳）サア今まで正兵衛さんヨも云ひンせんが那のお方ハ妾が十六の年お母さんと一途ヨ飛鳥山へお花見ヨ往た時悪武士三人ヨ難題を云ひかけられ迷惑の其場と助けて呉なんしたお武家様でありンスヨ（圓）成ほど其事ハお母さんがお歸りのうへお話しであつたが其時のお武家様が今那のやうな町人姿（柳）サア夫れゆゑ妾も不思議ヨ思ひィして若人違でハ有まいかと迂濶ヨ云ひ出しハしィせぬが姿形ハ變つても妾の胸ヨ變ゝぬ悌折を見合せ父さんが横死の樣子をお嘶し申し那のお方の手を假りて敵を撃ち度妾が望み（圓）夫れが誠の事ならバ願ふてもあい両人か僥倖お前が惚れた目かゝ見て然うと云ふのヨ間違のありもせまいが疎忽な事と（柳）ソリヤ心得てをりンすト道ふ折かゝヨ正兵衛が眼覺し出づる動靜を看るより嘶を他ヨ紛らしけり」座敷の掃除も片づきて雛妓どもハ湯ヨ赴き跡ヨハ客の正兵衛と姉妹両人となりければ正兵衛ハ二人ヨ向ひ（正）コレ華魁已もお前の處へ最う一年越しヨ通つて來るが實家を何處と云ハねェれハ大方外聞ヨ係ると思つての事であらうが今度不思議な事でコノ大和さんを助けゥァゥァ親類同樣になつたのだから何も遠慮をするヨハ及バねェ両人ともヨ包まずと素性を云つて聞かせあせへ（柳）大恩のある貴郎ゆゑ藏すといふ譯でハありンセンがッヒ今までヨ申いせんハ貴郎の本名をもお云ひあんしたら妾も素性を咄しいせう（正）己ハ素性だの本名のと其樣な大層な事ハ無ェが以前ハ二本の小刀と腰ヨ帶て歩行た事もあれど名を云ふほどの武士ぢや無ェ（圓）夫れでハ愈ヨ正兵衛さんハ（柳）やつぱり妾か思ひしゝ通り

モシお前妾を飛鳥山で見覺えがありィンせう（正）何んだ飛鳥山だ、オヽ成ほど違へ無ェお前ハ毋公と一途ヨ（柳）ハイ危い難儀を助かりィした大和屋善助の娘お柳でありィす（園）毋が歸つて云々との咄ハ耳ヨ存りまそれど其武士が貴郎とハ實ヨ思ひがけない事で御座います（柳）然うして貴郎ハ本名ハ何んと云ひなんしたェ（正）仔細あつて武士を棄て藍玉商人小間物渡世の阿波屋正兵衛といふより外ヨ名と云ふまじと誓ひしが飛鳥山ヨて出逢ふたる娘公ヨてあると所けハ當時の名を申さんが以前ハ阿州の浪人たる來嶋清二郎と云ふ者あり（両人）ヨヽ夫でハ來島清二郎とハ貴郎の事で御座りまそかハット計りヨ両人ハ互ヨ顔を看合せて須臾ハ辭もなかりけり

第三十四回

打ち駭きし姉妹ハ須臾ありて左右より齊しく正兵衛の傍へさし寄り（柳）原來ハ來島清二郎といふハ和郎の事ヨてありけるか（園）然う所くうへハお尋申し度ハ和郎ハ若や八王子邊ヨお出での事ハ御坐りませぬか（正）如何ヨも來島の其時ハ武州八王子ヨ遊歷して戸田孫四郎といへる劍客の家の厄介（柳）然うして矢張お名前も來島清二郎と仰しやりしか（正）阿州の涙人來島と唱へ居つたヨ相違ハない（園）夫れでハ彌ヨ父さんの讎か（正）何んと（柳）緣ハ緣（園）恩ハ恩（柳）年月索し姉妹が（園）怨の刃うけて見や妹油斷しやんな（柳）合點で御座んすと立ち上り姉ハ短刀妹ハ剃刀突いて懸りし両人の擧動を不審と正兵衛ハ卒然ヨ利腕腕と捉へ（正）以前の來島清二郎と聞いて俄ヨ仇喚ハはり如何なる仔細れあつての事か（柳）仔細といふハ五年跡武州日野の原ヨ於て千両餘の金を奪ひ（園）剩さへ其旅人を切害したる來島清二郎（柳）豈夫覺えのない事ハあるまい其殺された商人とそ（園）妾儕姉妹の實父大和屋善助（柳）父さんが横死ゆゑ覺ゑ渡世もなり難く續いて母さんも病死なされ伯父が惡謀ヨ罹りしとハ云へ此身も恁の苦界の勤め（園）妾も果敢ない藝妓稼ぎヨ身を窘めし其許ハ父と殺せし來島ゆゑと（柳）年月搜し索めたる其甲斐ありて今日の對面（園）重る恩儀のある人あがら（柳）父さんの仇一太刀なりと怨を酬う姉妹が（園）一念凝つたる刃を受けヨ（正）原來ハ日野の原ヨて切害したる旅人ハ両個の父公ヨて大和屋善助といふ人なりしか而しまた此清二郎が切害せしとハ如何ゐる事より知つたるぞ（柳）父さんが横死の折同じ原ヨ居たる乞食が正しく殺せし人も見たりまた其殺人が落したる鼻紙入れと拾ひとり持參し來たりし其中ヨハ馬喰

町なる旅人宿より旅籠料の受取書に宛たる名前ハ來島清二郎樣と認めありしを證據よして
(圓)今日まで探索しゝあり(正)成るほど成るほど然う所くうへハ名乘もしやうしまた仇と
あつて討たれても進せやうが今ハならぬ其譯といふハコレ両個とも心をしづめて能く聞き
なさい
ト是よりして八王子の戸田よ救ハれし事また同人が歸參の料千両の調達を引き受けしよ
り江戸へ金策よ來たり其歸途よ馬士の話を聞きて道ならずとハ思ひあがふ旅人を切害し
金子を得て立歸りしよ其師匠ハ跡部伴藏の爲めよ暗殺され剩さへ金と奪ハれ其後師匠の
娘お花とゝもよ甲府へ赴きしより今日までの身の上を具よ告けて復道やう
(正)今茲よて両個の爲めよ討たれて遣り度ものなれど師匠の仇なる伴藏が現在横川よ居る
と知れお園どのが一筆の迎ひを出せバ乘り込んで來るよ相違のない仇一太刀なりとお花よ
討たせ己も辛苦を水の泡よされし怨の伴藏が素首刎た其うへよて立派よ討たれて死よもし
やう併軟弱姉妹が其腕前ぢやァ覺束ないからお前の手をバ下さずとも此清二郎れ首ハない
バッテ決して命をゝしむのぢやないお前衆が父の仇を討ちたいと思ふ遺憾さハ同じ思ひのお
花よ一太刀本望を遂げさせ度ばかり恰度茲よある白石嘶の義太夫本此清二郎ハ物六よもな
りまた園七ともあらねバならぬ夫れともよ聞分けずに討たうとするなら是非なくも縛あげ
て茲を立退くより外ハない然うなる時ハ二人とも却て人よ笑ハれやうからお花が牢から出
でたる後首尾能伴藏と擊つまでの處已の命を已よ預けて惴ずと辛抱するがよい已も以前ハ
武士だ逃隱をする卑怯者でもないから暫しの間ぢや聞き解けて命を已よ預けて下さいと綜
を分けたる正兵衛の辭よ元來姉妹ハ恩と云ひまた義理と云ひ殊よハ軟弱両個の腕よて強て
討たんとする時ハ却て不覺をとる事あらんと思ヘバ整ひ腕立てより渠が辭を承諾てまた其
後よ詮術あうんと云合さねど姉妹ハ同じ思ひよ暮居たり

第三十五回

茲よお花ハ富士屋よての强迫の科よて召捕とおり百般取調と受くると雖も元來三百両ハ才
助と相對の貸借なれバ强迫し金にハあらざるなりまた迫强しと云ふハ何を種よて申し込み
しか夫れ等をお糺し下されなば强迫よわらぬ事分明すべしと云ひ立たるより一体今度お花
を召捕となりしハ才助より其筋の下吏輩へ賄賂を送り引あげし事ゆゑ强て强迫れ原因を取

糾す時ハ小判密賣の廉露顯し才助が身ヨ反て毛を吹き疵をもとむるの患を生ずるなれバと再度掛りけ役吏へ金子などと掴ませ始くお花の取調を中止し牢舍ヨ繫げ置きたるが今ハ女牢の名主となり洋妾お花ハ婆婆れみあゝで地獄の内ヨも名高かりき」不自由の中を不自由せぬお花ハ蒲團の上ヨ座し同房の者に肩腰撫でさせ(花)所けやァ今日新入りがあるとの事だが未だ來ないのか(女)先刻這入りましたが頭ハ寐て居なすつたゝら未だ引合せをしませなんだオイお婆アさん此方へ來て頭に挨拶とおしヨ(市)ハイ〳〵御免下さいませモシお花さん能く無事で居て下さいましたネエ(花)オヤお前ハお市さん是れハ不思議お如何して茲へ(女)夫れぢやァ此お婆アさんも頭の知つたお人ですか(花)知つた處か平常妾が話しをする刺墨お市といふ人だァネ(女)其んなゝ噂ヨ聞いたお市姐公でもか然うとハ知らゝいず無遠慮ハ何卒御免なさいませ(市)如何して〳〵昔ハ是れでも些たァ地獄の利者でしたが今ぢやァ只れお市婆アは是れからハ皆さんのお世話ヨあゝる身體併し頭のお花さんといふハ妾が恩人のお内儀さんゆゑ此末ともヨ万事を願ヨそヨ(花)お前ハやァ如何いふ譯で這入つたの(市)お花さんお前さんヨ顔と向けるも濟まないと云ふハ石川ヨてお前さんと文吉が御用ヨなつて引ゝれたといふを聞き妾も直ぐヨ訴へて出やうとハ思つたゝれどト是れより第卅一二回

ゝて清吉へ面會の段ヨ述べたる通りを語りまた八幡屋といふ藝妓屋を開きし事より闘すも清吉ヨ邂逅同人の物語を聞き當今の身の上を話したる事また酒匂川ヨ於て取遁せし伴藏れ糸屋半右衛門が自分の抱大和を身購せんとしたる一條渾て一別以來の事より清吉が身の變遷まで詳細延べ(市)乾盃の無事も分りお目ヨかゝつたうへ仇の所在も知れてある事ゆゑ早くお前を婆婆へ出して仇を討たせませうと思ふゆゑ深川の住居をしまつて乾盃へ別と告げ此横濱へ來ましたが思ふやうヨ入牢も出來ないで漸と昔の掙了をはじめ板の間二三ケ所で首尾能捕り掛りの人ヨ甘く握らせお前さんれ居る房室へ新入りを去たハお目ヨかゝつて委細を告げ富士屋れ一件ハ元々妾の發起ですから此身ヨ引受けお前さんを早〳〵婆婆へ出す積り是れから後ハ何事も妾ヨ任せてお置きあさい(花)其れぢやァ清さんハ御無事であつたか神や佛を念じて居た其の甲斐あつて嬉しい便アゝ添けあい〳〵年老つたお前一人ヨ罪と被せるハ心ヨ濟まねど切て一太刀仲藏を切つたうへ〻よて名乘つて出るかゝ其れまでの處をお市さん何卒脊負て居て下さい(市)ハテ其の心配ヨやァ及びませぬから明日ヨも妾が調の

時お前の明白の立つ樣ゐ妾がすつかり云ひ立てるからお前も其氣でおゐでなさいヨ併しお前さんも二年越しよよく壯健でおゐでなすつた其れが何よりお目出度(花)婆婆ゐ居る時洋妾のお花で華美を盡したので斯んゐ不幸の僥倖ゑて這入ると間もなく牢名主格別不自由もしませおんだ眞實ゑお前の顏を看て斯んな嬉しい事ハあいヨ(市)未だ〳〵妾の顏よりハ嬉しい顏が見られませうから夫れを樂みゑ今夜ハ夢でも御覽なはいナ(花)男心と秋の空此末がまた案じられ(市)オヤ疑惑深いモシ乾盃ハまだ獨身ですヨ

第三十六回

刺墨れ市が人牢のうへ彼富士屋の强迫も全く自己が爲せし業ゐれどお花をも供ゑ同罪ゑ陷ゐれんと思ひ觸せーなりと申し立てしかば這ハお花の罪をも其身ゑ引受けしものなるべしと推しゆゑ竟ゑお花ハ放免の沙汰ありて出獄の身となり直ぐゑ江戸ゑ來たりて元町なる濟吉の正兵衛が寓居に赴き盡ぬ兩個が對面ゑ積る話の數々ハ架々しけれバ茲ゑ記さず再說濟吉ハれ花が無事ゑ出牢したるうへハ仇跡部を擊つて師の靈牌へ手向け其後れ園姉妹の手ゑ罹り死なんものをと心ゑ決し或日久七父母とお園を呼び寄せ道へるやう(正)兼てお話をした通り女房の爲めゑ實親私の爲めゐハ師匠の仇跡部伴藏の糸屋半右衛門を討て怨を散したく是れより横川へ出掛ける覺期其れゑつけてもお園さんから以前の大和の頃ゑあつて媚く筆ゑて喚び出して下すつさら惚くも來るゑハ相違なし其首を待ちうけ世間の人の噪がぬ樣ゑ討ち度望ゑ夫れゆゑ久七をも呼びましたまた久兵衛さんへお賴みハ些少かなから所有金を殘らずお前へ進ぜまそるから是れを資本に何んなりと商業をして復の樣ゑ立派な店ゑハならずとも取繫で下さいませまたお園さんゑ云つて置くハ花柳の事昨日身購をして置たから今日か明日ゑハ私の宅へ那れ子が大方來ませうから私們夫婦が首尾能仇を討つて當地へ戻るまで俱ゑ當家を賴みます(久兵衛)富士川ゑて救けられた恩があるとて悴の身ゑつき段々お世話ゑなつたうへまた此金を受けましてハ何うも心が濟ませぬお歸りまでの不在番ハ疑り致してをりまそから此金ハヤアお納あされて(花)其御辭退でハ困ります首尾能本望と遂げる積りでハ御座りますが先も聞こゐし劍客ゆゑ萬一反討ゑでもなつた時ゑハ何卒跡々の吊回向夫等もれ願申し度是非ともお納下さりませと辭退を强て納させ聽てお園ゑ手紙を認め横川村へ飛脚と立て其身も續いて身準備あし虎之助の龍達勘助の勘七を引連れ水

盃を酌替し元町の寓居を立ち出でけり」横川村の糸屋にてゝ江所のお園より使來たりて差出す書翰を讀下す折からドヤ〳〵入り來たるゝ同地ゑ名代の破落戸横川爲五郎の乾兒重吉友五郎の両人なり夫れと看るより(重)旦那大層御機嫌な顏色ですが(友)濱から儲けの通信でもありましたか(半)利益處ぢやない夢でゝおいかと思ふ樣な嬉しい一件ぢやれ前方も知つて居る江戸深川れ藝妓八幡屋の大和を身購ゑやうと手金まで渡した折かゝ八幡屋の婆々ァが變心から已の方へゝ手金を戻し遂々身購もべれゑなり忌々しさゑ其後ゝ江戸へ往つても深川へゝ足踏みさへもしなかつたがコレ何う思ふたか其大和から態々使で招きの文サ(重)然イッァ御馳走といふ一件だネェ(半)此節ゝ吉原の大文字屋の妹の許ゑとりますから是非とも出かけて來て呉ろ今まで強面致しました代りゑ佶度お詫を致しますと虚か實か知らないがぜひ〳〵〳〵が二百字餘り書てあらァ(友)旦那の樣ゑ金がありやャ何うも結局ゝ此方れ者手紙をよこしたといふのゝ得心をした證據ですから此機を外さずれ出かけなせへ(半)何うせ江戸へも用があるかゑ出かけて見やうがお前達も來無エろ(兩人)有難へれ供すしやせう(半)斯んな呼び出しがかゝるだらうと今まで女房も迎へず獨身者で居たが成ゑど

戀路ゝ辛抱が第一だ

第卅七回

清吉夫婦が釣出だせし計畧の文とゝ夢知ゑぬ跡部伴藏の糸屋半右衛門ゝ此度こそ戀慕ひし大和を手ゑ入れ連れ飯り手活の花と眺めんと重吉友五郎の両人と供ゑ隨へ横川村を出立して中山道筋ゑ出で倉ケ野れ宿より渡船ゑ乘り川を越し早くも新町へ着きたりけり(半)少し寒氣がする樣だが熱燗で一杯飲かけて行かう(重)酒と聞いちやァ辞退ゝゑやせぬ那處の店の鰌汁ァ滅法廿へといふことでそから那處で憩んで行きやせう(友)オイ爺さん鰌汁で二升計り熱く燗をして大急ぎだ(亭主)是れゝ入らッしやいお早やうでざい升鰌汁でぱ酒を宜しうぱ座います(半)何んだか疾く江戸へ行き度て碌々尻も落着ない(重)大和といふ藝妓ゝ何んな綟致だか知りませぬが旦那ゝまた大層氣ゑ適つたものですチェ(半)サァ其の大和が氣ゑ入つたといふも譯がある實ゝ已ゝ八王子生れで未だ二本佩刀で居た時分ゑ同所の戸田孫四郎といふ劍客の娘花敷といふ者ゑ惚れ込んで度々口説けど應とゝ云ゝず遂々已ゑ肱を喫ゝせ果ゝ當家れ門弟であつた清二郎といふ奴の女房ゑなり己が望みも全く寂滅諦めてゝ

見たものゝ其戀しさゝ忘れゝれず其後東海道れ酒匂川で圖らず其娘ゝ出會たゆゑ何うやら甘く出來さうな處へ邪魔が這入て物別れ切てゝ花歟ゝ肖た婦人と思ふて暮す折からゝ圖らず出逢つた那の大和何處ゝ肖て居る容貌と見込だ後ゝ屢々と通ひ長らく肱を喫て居たが今度ゝ婦人も漸くゝ折れて迎の媚く手紙譯と云のゝ此通りサ(友)其ぢやアゝ前さんれ惚れたといふのゝ戸田の娘の花歟ですか(半)汝ゝ那の娘を知つて居るか(友)私が甲州の勇藏乾盃れ處ゝ居た頃成島の大五郎の客分で鬼清吉といふ奴の女房ゝ花といふゝ以前八王子れ劍術遣へ戸田孫四郎れ娘花歟といふ者だと當時噂ゝ聞きやしたが成るほど那れなら素敵な尤物だ(半)其ぢやアゝ其の鬼清吉といふゝ來島清二郎といふ奴ゝ違ひないが遂々夫婦ゝあつたものか忌々しい(重)旦那へ餘んまり機嫌過ぎあいうちゝ徐々と出掛けやせうか(半)成ほど話に實が入つて尻が重くあつたオイ〳〵爺さん勘定だと錢と與へて三人ゝ今此處を過ぎんとする向ふへスッと清吉夫婦(清)見忘れしか跡部伴藏今も汝が物語し戸田の門人來嶋清二郎だ(花)酒匂川ゝて取遁せど今日ゝ遁さぬ父の仇(清)性根を据て(花)覺期なせ(半)思ひがけない清二郎花歟コリア如何だ(友)成るほど汝ア鬼清吉(重)如何して茲等をまでつくのダ

(清)師匠と害せる其罪ゝ今更めて申さずとも汝が胸に覺えあるべし藏妓大和れ釣文ゝて呼寄せたるゝ吾々夫婦が苦肉の計策と知らざるか(半)ナンと(花)汝も跡部伴藏なり潔よく勝負をせよ(伴)大和の文ゝて喚出せしとゝ心得難き事なれど此場ゝ詮議も無益なり望れ通り雌雄を決せんソレ兩人とも助太刀しろ(友)大塚村の乾盃と殺した怨のある清吉が命やア己が取るのだ(清)何ゝ小癪なと五人の者ゝ各自準備の一刀引き抜き須臾鬪ひ居たりしが重吉友五郎れ兩人ゝ難あく清吉の刀の下ゝ斃れし動靜を見るよりも心憶せしものなるか伴藏ゝ身をかへして遁げ出だせバ兩人ゝ卑怯な伴藏遁がさじと追蒐け行きて今ゝはや間近くゝなつたるゝぞ身と跳らせて流れの川へ飛入りしまゝ水練ゝ姿ゝ見えずなりたりけり

第三十八回

水を潛りて一旦ゝ遁げ失たれど清二郎が豫ての合筈曠しからで遂ゝ横川村ある伴藏の宅ゝ押寄せ首級をあげたる夫婦が欣び躰て床ゝ戸田孫四郎の位牌を飾り前ゝ件の首級を供へ夫婦ゝ之れを手向けつゝ暫く合掌三拜なし艫て清二郎ゝお花ゝ向ひ(清)卑怯未練の伴藏ゆゑ若も遁げ出す事もやと江戸を立つ時連れて來た保科と出羽を當地へ廻し網と張して置い

魚清吉之

たと知らず桑の如くよ川へ飛込ゝ在所へ歸つて立退く准備を夫れと察して勘介が飛出して來ての注進ゆゑ直ぐよ不意とも押かけたので首尾能擊た父の仇卿も嘸がし本望であらう（花）是と云のも和郎と云ふ後盾があつたゆゑ父様も冥途から欣喜でおいでだらう（清）オイ勘介然うして保科ハ何處へ往つたか（勘）今茲の奉公人を引き連れて藤五郎乾盃の所へ出かけ若し乾兒の衆が喧嘩や泥棒だと心得違へをせぬ樣と頼んで來ると云ひやした（清）其りや宜處へ氣が注いた此噪をバ村内で遣り度無ェゆゑ途中まで釣り出しハしたが遁げられし爲め據處なく茲まで來たのだ屆せへすりや先も男正可抗つて來る事もあるめェ偖是れからが身の落着汝も保科も何時が何時まで遊人で居るよりやア幸へ伴藏が强慾非道で貯へた此金を両人で分ち何國へありと立退いて堅氣よなつて暮すがいゝ巳とハ違つて汝も保科も御法よ背くハ博奕れみ人殺し强盜があるといふでハなし敗心さへすりや元の素人巳ハ遁がれぬ大罪の度重あつてある事ゆゑお花の爲めまた巳が爲めよ仇と覘ッた伴藏を討ちさへすりやおそのお柳れ両人よ遣つた此身体名乘て出かける覺期だから巳が處刑よなつたと聞いたなら其時一遍の回向と頼むぜ（勘）其れぢやア何うでも乾盃ハ名乘つて出かける覺期ですか（清）師匠の爲めたア云ひながら辜ない人と手よかけて金と奪ふた此清吉遁がれやうと云ふても天道の道がさぬ網よ罹るより潔よく自首て出て公儀の處刑を受ける覺期特よ今迄話ハ去ねェが巳が實家の來島家も首尾能兄が家督を相續國許住居となつたうへ格も昇つて繁昌と江戸へ來た後探索えたから心よかゝる雲もなし最期ハ適れ武士精神鬼清吉で斯られて死ぬのだ（勘）其樣あら姐公も承知をして（花）留めても留まらぬ日常の氣性妾も覺期として居るのサ（勘）成るほど見あげたお兩人れ覺期其潔白を聞くうへハ私も今から心を改め堅氣よなつて乾盃の吊祭回向を致しやせう（清）オヽ其れがいゝ己も頼みだ（虎）大哥委細ハ次室で聞やした此虎之助も會津浪人是れゝら暫つて堅氣よなり身の本分を立ませう（勘）オヽ保科大哥其れぢや万事を听なすつたら（虎）藤五郎よ逢つて仇討の次第を語つて乾兒儕のがやがや云ふのを取鎭靜當家の雇人を引渡して歸つて見ると大哥から汝へ意見の最中ゆゑ樣子ハ殘らず立聞しましたモシ大哥二言とハ申ませぬ恐れ入たお前れ所存だ（勘）人ハ一代名ハ末代斯ういふ度胸よなり度ものだチエ（清）藤五郎へ渡りせへ濟みや長くとつてハ何かの妨げ直ぐよ茲をバ引き拂ハう併一筆此禊戸へ今日の顚末を認めて事蹟を口碑よ遺させやう

第三十九回

夫れ苦樂得失ハ惑よりして生じ生死禍福ハ天の主るところにして敢て云ふべからず來島清二郎ハ一旦の義よりて家を出でしが終よ其生涯と誤まり躬ら罪狀を訴へ出でしと以て小塚原よ於て死刑よ處せられ首を三日間梟されけるが覺期の前にもお花の歎き久兵衛父子ハ云までもなくお園姉妹も共れと聞より涙よ乾く袖だよもなかりしが軈て其筋よ手と盡して清二郎の死骸を引取り菩提所よ葬送ハしたれども下總無宿鬼清吉よて刑よ就きたる事ゆゑ來島清二郎の葬送よハ差支へとてなかりしとぞ清吉が辭世の俳句ハ「鬼蔦もきれて根のおき枯野かな」とありたり維れ慶應三年十一月れ事なりしがお花の尼ハ清二郎が後世の爲めとて兼て期したる鎌倉の某寺よ入りまた久七ハ江島屋より暇を乞ひし後お園を迎へ妻とし久兵衛を養ひお柳ハ横濱の両替商某甲と云へる吉原に在りし頃の馴染客が妻とあり出生の一子を以て大和屋れ家名を相續させる約束と結び漸く夫々よ身の結局のつきたりけり

第四十回

折ふし明治維新の革命より御即位の大赦を仰出だされ横濱の牢よ在りしお市も放免の身となり江戸よ來たり清二郎の死刑よ處せられしを聞くより忽ち白髮と剃り落し積年の惡業を滅せんと是れもお花の跡と追ひ鎌倉れ某寺よ赴きお花よ面會し聞くも語るも涙よて人ハ定業不定業非業不非業の外よ出でざれど只一念の發起よ如くハなしと浮世の夢の果敢なきを嘆ぜしがお市ハ當日測らず同寺へ來り會せし其身の甥なる小石川水道町の安藤由次郎といふ者よ面會せしよりお花よ別れを告げて江戸よ歸り同人よ談じて清二郎の爲めよ千住なる回向院の別院へ一基の石碑を建立し命日毎よ參詣しまたお花ハ素より久七夫婦お柳等も參詣してハ茲よ集ひ昔話よ袖と濡らせしとかや然るよお柳ハ不幸よして病よ死し久七夫婦ハ久兵衛が死去の後商法の都合に寄り甲州よ赴き今も生存しお花ハ明治五年の頃諸國れ靈場を參拜せんとの祈願と起し鎌倉を出立しさるまゝ今よ其生死を知らず獨りお市ハ昨十七年の七月まで存命なりしが同月下旬格別の病とてもなく大往生を遂げしハ七十九歳の高齢なるよし寔よ目出度終焉といふべしお市が建立せし清二郎の墓碑ハ「鬼清吉之墓」と彫つけあるを見て何者とハ知らねど日々參詣をする者ありて香華の絶ゆる隙なかりしと這ハ彼の鬼の面と黄きたる紙よ包み金子と惠まれたる貧民れ爲せる所爲あるべしと云へり此墓碑ハ去

る十年の頃までありしが一年洪水の砌流失せしとか果して然るか否やい知らず噫人生の園生に咲き花あく實もなき善悪草も根分けと培養の努めよりなゞ聊か世益ともなる事あらんと思ふがまゝよ長々しく紙上に文字を植ゑたれ共見榮れあかりしい記者の無器用あれゞなり

善悪草園生咲分畢

明治十八年五月廿五日御届
仝　九月　日出版

定價四十五錢

演述人　談洲樓燕枝
編輯人　京橋區宗十町十七番地　雜賀豐太郎
出版人　日本橋區室町三丁目六番地　牧野惣次郎

大賣捌所

京橋區鎗屋町拾四番地　野村銀次郎
同區尾張町　上田屋榮次郎
日本橋區横山町二丁目　鶴聲社
同區同町三丁目　辻岡文助
京橋區南鍋町　兎屋
日本橋區馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛
同區藥研堀町　鈴木喜右衛門

東京圖書館

和書門	類	一函	七架	二〇號	一冊